

# ヨブ記

本書の名稱は、書中に記してある高德の人ヨブに因んだもので、彼は最も事實らしい説によれば、エサウの血統に屬し、創世記三六・三三にあるエドムの王ヨバブと同一人である。本書の記者が誰であるかは明らかでない。ヨブ自身だという人もあれば、モイゼ、もしくは預言者たちの中の誰かだという人もある。ヘブレオ語聖書では、第三章の初めから第四十二章まで、韻文で書かれている。この話には選民イスラエルの歴史以外の出來事が述べてある。

## 第一章

ヨブの高德と巨富—サタン天主に許されて彼よりその財産を悉く奪う—ヨブの忍耐。

一 フス<sup>1)</sup>の地<sup>2)</sup>に、名<sup>3)</sup>をヨブ<sup>4)</sup>という人<sup>5)</sup>ありしがその人<sup>6)</sup>は素直<sup>7)</sup>にして正<sup>8)</sup>しく、天主<sup>9)</sup>を畏<sup>10)</sup>れ、惡<sup>11)</sup>を避<sup>12)</sup>けたりき。二 彼<sup>13)</sup>には七人<sup>14)</sup>の男<sup>15)</sup>の子<sup>16)</sup>と三人<sup>17)</sup>の女<sup>18)</sup>の子<sup>19)</sup>と生<sup>20)</sup>れたり。三 またその所有物<sup>21)</sup>は、羊<sup>22)</sup>七千頭<sup>23)</sup>、駱駝<sup>24)</sup>三千頭<sup>25)</sup>、牛<sup>26)</sup>五百耦<sup>27)</sup>、牝驢馬<sup>28)</sup>五百頭<sup>29)</sup>、  
三 なお召使<sup>30)</sup>も甚<sup>31)</sup>だ多<sup>32)</sup>くして、この人<sup>33)</sup>は東<sup>34)</sup>のすべ<sup>35)</sup>て

第一章 1)フスの地とは、哀四・二一からもわかる通り、エドムの一部。—2)ヨブの素性については本書の前書を見よ。—3)子孫、殊に男の子の多いことは、天主の特別な御祝福とされていた。—4)牝驢馬は乳を出すので、一段と價高く、この地方では牝驢馬の三倍の値段であつた。

四

五

六

七

の人の中にて大いなる者なりき。<sup>5)</sup> 四その息子等、  
 行きて家毎にそれぞれ己が日に<sup>6)</sup> 饗宴をなし、己  
 等と共に飲食せしめんと、人を遣りてその三人の  
 姉妹を招きたり。<sup>7)</sup> 五その廻り來る饗宴の日過ぎ  
 去る度に、ヨブは彼等の許に人を遣して彼等を潔  
 め、<sup>8)</sup> 夜の明方に起き出でて彼等各々の爲に燔祭  
 を献げたり。即ち彼云えらく、「恐らくはわが子  
 等罪を犯し、その心の中に天主を冒瀆せしことあ  
 らん。」と。ヨブはいずれの日にもかく爲せり。  
 六然るに或日天主の子等<sup>9)</sup> の主の御前に立たんと  
 て來りし時、サタン<sup>10)</sup> も亦彼等の中に居りしが、  
 七主彼に曰いけるは、「汝は何處より來れりや。」  
 彼答えて云いけるは、「我は地を巡歴りて、遍く

5) 小アジアの遊牧民族は今でもまだ富や  
 勢力を測るのに、金よりも寧ろ畜群や運  
 搬用、耕作用家畜の数を以てしている。  
 創一三・二―六参照。 6) 多分誕生日、  
 または周期的にまわつてくる家庭の祝い  
 日に。 7) この娘たちには自分の家とい  
 うものがなく、母の所に、その天幕に、  
 住んでいたのである。 8) 貪食や悪口な  
 どで何か罪を犯したのを償うために。  
 9) 天主の子等とは天使達。彼らはこの世  
 ならぬ、天主に似たものである故に、か  
 く稱せられる。 10) この光景はたゞ象徴  
 としてのみ理解される。悪魔は天主の御  
 許容がある場合だけ、人間の運命に干渉  
 することができる。

八 之を歩み來れり。11)と。八主また彼に曰いけるは、「汝はわが僕ヨブに注目せしか。實に彼の如く素直にして正しく、天主を畏れ惡を避くる人は世にあらざるなり。」九サタン之に答えて云いけるは、「ヨブと雖もいかで報いなきに天主を畏れんや。一〇汝は彼とその家及びそのすべての所有物の爲周圍に垣を設け給いしに非ずや、汝彼の手による事業を祝し給いしにより、その所有物地上に殖えたるに非ずや。12) 二されど少しく汝の御手を伸べて、その有てるすべての物に觸れ給え、彼果して汝を面罵することなきや。」13) 二三主乃ちサタンに曰いけるは、「視よ、彼の有てる物は擧げて汝の掌中にあり、ただ彼の身には汝の手を差伸ぶるなかれ。」14)と。是に於いてサタン主の御面前より退出せり。二三さて或日彼の子女等、その長兄の家にて食事し葡萄酒を飲み居たる時、一四使者ヨブの許に來りて云いけるは、「牛耕しおり、牝驢馬その傍にて草を食みおりしに、一五サバ人15)襲い來りて悉く之を

11) 彼前五・八。弗六・一二参照。この云い方で、惡魔は自分が世を支配する力を持つているというつもり。  
 12) 惡魔は悪い事を見つけぬ時には、善い事にケチをつける(聖グレゴリオ)。一三) 本章五節参照。一四) 天主はヨブをためすために、惡魔の誘惑を許容される。  
 15) サバ人の昔の故郷は北アラビアであつた。

奪うばい、劍つるぎもて僕等しもべらを撃うち殺ころせり。我われただ獨ひとり、汝おんみに告つげんとて遁のがれ來きたりぬ。」と。一六そのなのお語かたりおる間あいだに、また一人來ひとりきた

りて云いいけらく、「天主てんしゆの火ひ」<sup>16)</sup>天てんより下くだりて、羊ひつじ及び僕等しもべらを撃うち、之これを焚やき盡つくせり。我われただ獨ひとり、汝おんみに告つげんとて遁のがれ來きた

りぬ。」と。一七またそのなのお語かたりおる間あいだに、更さらに一人來ひとりきたりて云いいけるは、「カルデア人びと」<sup>17)</sup>三隊たいに分わかれ、駱駝らくだを襲おそいて

之これを奪うばい、剩あまつさえ劍つるぎもて僕等しもべらを撃うち殺ころせり。我われただ獨ひとり、汝おんみに告つげんとて遁のがれ來きたりぬ。」と。一八そのなのお語かたりおる折おりしも、

視みよ、また一人入ひとりいり來きたりて云いいけらく、「汝おんみの子むすこ女むすめ、その長兄ちやうけいの家いえにて食しょく事じし、葡萄酒ぶどうしゆを飲のみ居いたるに、一九俄にわかに荒野あれのの

方かたより暴風襲ほうふうおそい來きたりて、家いえの四隈よすまを揺ゆり動うごかしければ、そは汝おんみの子等こらの上うえに倒たおれて彼等かれらを押おし潰つぶせり。我われただ獨ひとり、汝おんみに

告つげんとて遁のがれ來きたりぬ。」と。<sup>18)</sup>二〇時ときにヨブ起たち上あがりてその

16) 天主の火とは或る人々の説によれば、雷火、他の説によれば疫病、もしくは荒野からの熱風。一七) カルデア人はペルシヤ灣の北岸に住んでいた。アブラハムの故郷ウルもその地域にあつた。彼らはアラビアから移住して來たのである。  
18) 禍の順序は、二、三、兩節にあるヨブの財産の記述と逆の順になつてゐる。前のは大きいものから小さいものへ、こゝでは小さいものから大きいものへと、記してある。かように惡魔の惡意は、次第に試練の辛辣の度を加えるのである。



衣服を裂き、<sup>19)</sup> 頭を剃りて地に平伏し、禮拜して、

云いけるは、「我は裸にてわが母の胎を出でたり、

さればまた裸にて彼處に歸らん。<sup>20)</sup> 主與え給い、主

取り給えり。主の欲み給うままに成れかし。<sup>21)</sup> 主の

御名は讚むべきかな。」と。三 すべて是等の事に於

いて、ヨブはその唇もて罪を犯さず、天主に對して

愚なる事を云わざりき。

### 第二章

サタン天主に許されてヨブの身を撃つ—三人の友見舞に来る。

一 また或日天主の子等の來りて主の御前に立ち、サ

タンも亦彼等の中に加わり來りてその御眼前に立ち

し時のことなりき、<sup>1)</sup> 主サタンに曰いけるは、「汝

は何處より來れりや。」彼答えて云いけるは、「我は

19) 上衣を裂き (創三七・二九。利一〇

・六など)、頭髮を剃る (賽一五・二

耶七・二九など)のは、哀悼の習慣。

20) 大地はいわば、すべての人間を、そ

の獲た空しいものを剥ぎ取つて迎え取

る共通の母胎のようなもの。—21) 天主

の御意に従うのは、殊にいやなことにお

いては、人間のなし得る最大の善事。

第二章 1) 本一・六参照。天主の御前  
の第二の光景。

三 地を巡歴りて、遍く之を歩み來れり。」と。三主またサタンに  
 のたま 曰いけるは、「汝はわが僕ヨブに注目せしか。實に彼の如く  
 素直にして正しく、天主を畏れ惡を避け、なお潔白を保てる  
 人は世にあらざるなり。されど汝彼に對し我を動かし、故な  
 四 くして彼を惱まさしめたり。」四サタン之に答えて云いけるは  
 一皮の爲には皮を、<sup>2)</sup>されど己が生命の爲には、人その有て  
 五 る物を悉く與えん。五ただ汝の御手を伸べて、彼の骨と肉と  
 に觸れ給え、さらば汝、彼の汝を面罵するを見給うべし。」  
 六 主乃ちサタンに曰いけるは、「視よ、彼は汝の掌中にあ  
 七 り、されど彼の生命は害するなかれ。」と。七かくてサタン  
 八 主の御面前より退出するや、ヨブを撃ちてその足の裏より頭  
 の頂まで惡性の腫物を生ぜしめしかば、<sup>4)</sup>八彼塵塚の上に坐  
 九 し、<sup>5)</sup>九 陶器の破片もて化膿せる處を搔けり。九時にその妻彼

2) 諷的な云い方。聖エフレムを始めとして、他の誰も「自分の生命を護るためには、躊躇せず他人の生命を犠牲にする」の意に解している。—3) 原語「SERVA」守れ。—4) ヨブの病氣は癩、更に詳しく云えば、象皮病であつたらしい。—5) 塵芥残物などは、村の入口の前に持ち出して捨てたので、時のたつ内に小山のようにうず高く積もつた。貧しい人々(詩一一三・七)や排斥された人々(賽四七・一。拿三・六)はそこを宿としていた。

一〇 に云いけるは、<sup>6)</sup>「汝な、お汝の素直を續くるか、天主を呪いて死すべし。」<sup>一〇</sup> 彼之に云いけるは、「汝は愚なる婦の一人の如くに<sup>7)</sup> 語れり。我等天主の御手より善きものを受けしならば、何故また悪しきものをも受けざるべけんや。」と。すべて是等の事に於いてヨブはその唇もて罪を犯さざりき。<sup>二</sup> 然るにヨブの三人の友、彼に臨みし不幸の一部始終を聞くや、各々その處より來れり。テマン人エリファズ、<sup>8)</sup> スヘ人バルダド、<sup>9)</sup> 及びナーマ人ソファル、<sup>10)</sup> 即ち是なり。蓋し彼等は相語らいて共に來り、彼を見舞い、目慰めんとしたるなり。

二三 彼等目を翹げて遙かに望見たるに、その彼なることを見分け得ざりしかば、聲を擧げて泣き、己が衣服を裂き、天に向かいて己が頭上に塵をふりかけたり。<sup>11)</sup>

<sup>6)</sup> 惡魔はエワを使つてアダムを陥れた様に、ここでもヨブの妻を用いて彼を誘惑しようと思つた。彼の妻は太祖ヤコブの娘ダイナであつたといふ傳説がある。「<sup>7)</sup> 愚なる女」とはここでは不信仰な女、罪深い女の意。<sup>8)</sup> エリファズは最年長者で（一五・一〇）、エドムの南部にあり人々が賢いこととで有名なテマンの出身。<sup>9)</sup> バルダドの故郷スヘは、同じくエドムのアラビア人領。――<sup>10)</sup> ソファルの生まれの町ナーマは、エドムの南方にあつたユダ族領の町の一つであつたらしい。――<sup>11)</sup> 頭上に塵をふりかけるのは、この上ない悲しみのしるし。

二三 かくて彼等七日七夜<sup>12)</sup> 彼と共に地に坐しおりしが、  
 誰も彼に言をかくる者なかりき。蓋は彼の苦惱の甚だ  
 しきを見たればなり。

12) 死者のための哀悼は七日間(創五〇・一〇。母上三一・一三)。地に坐すは哀悼の風習の一つ(母下一三・三一。結二六・一六など)。

### 第三章

ヨブ人生の悲惨なることを述懐して、己が生れし日を呪う。

二一 一この後ヨブその口を開き、己が目を呪えり。1) 二即ち  
 曰く、<sup>三</sup>わが生れし日は失せよかし、人胎に孕れりと  
 云われし夜も然あれかし。2) 四その日は暗黒に交れか  
 し。3) 天主上より之を鬱し給わされ、光之を照らすな  
 かれ。五暗黒と死の蔭之を隴ならしめよ、霞之を徹  
 え、そは悲苦に包まれよ。六その夜<sup>4)</sup>は暗き旋風の有  
 となれ、そは年の日の中に加えられざれ、月の中に数  
 えられざれ。七その夜は荒涼しくして、讚うるに足ら

第三章 1) 三、一〇兩節によれば、自分の生まれた日。2) ヨブの激しい嘆きは天主の御定めに対する反抗ではなく、たゞ苦惱の激しさを自然の情によつて云い現したものに過ぎない。—耶二〇・一四。3) 眞暗闇の日とは、日でないのと同じ。4) 彼が胎に孕つた夜。三節参照。



八 ざれ。八日を呪う者、<sup>5)</sup> 大海獸<sup>6)</sup> を怒らしむるを厭わぬ者  
 九 之を呪え。九星辰は霞みて暗くなれ、そは光を待ちて之を  
 見ず、また東雲の明け行く始をも<sup>7)</sup> 然することなかれ。  
 一〇 其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一 一。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 二 二。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 三 三。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 四 四。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 五 五。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 六 六。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 七 七。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 八 八。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 九 九。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一〇 一〇。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一一 一一。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一二 一二。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一三 一三。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一四 一四。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一五 一五。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一六 一六。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一七 一七。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去  
 一八 一八。其は我を生みし胎の口を閉じず、わが眼より禍を取り去

5) 悪靈を呼んで、或る日を不幸の日とする魔法使。—6) 大鰐、四〇・二〇参照。人畜を餌食にする恐ろしい爬虫動物。—7) そのあとに来る朝をも。—8) 父親は生まれたばかりの赤兒をわが子と認める印に、膝の上に抱きあげるのが慣であつた。—9) 草葉のかげの安息は、この世の旅路の終りとして、死後の靈魂の狀態に關係なく、ヨブの讚美する所。—10) 記者は多分エジプトのピラミツドや王の廟やペトラの岩の中の墓のことを思い浮かべているのである。—11) 諸侯の屍は多くの寶と共に墓に納めるのが常であつた。—12) ヨブはここでたゞ苦しみのなくなる幸

一九 繋つながれし者ものども共ひとも齊ひとしく苦くるしむことなく、酷こくし使しする者ものの聲こゑを聞きかず。一九 小ちいさき者ものも大おほいなる者ものも  
 二〇 彼か處ちにあり、僕しもべも主人あるじを離はなれて自由じゆうなり。二〇 何なに  
 二一 故ゆゑに悲ひ慘さんなる者ものに光ひかりが、心こゝろの惱なやめる者ものに生いのち命めいが  
 二二 與あたえられたるぞ。二二 彼等かれらは宛さながらら寶たからを採たずねて地ち  
 二三 を掘ほる如ごとく、死しを待まてども來きたらず、二三 墓はかに入いる  
 二四 を得えば、大おほいに喜よろこぶなり。二三 人ひとに二四 その道みち隱かく  
 二五 され、二五 天主てんしゆ之これを聞きても圍かこみ給たまへるか。二四 我われ食しょく  
 二六 する前まえに嘆たん息そくし、わが呻うめき吟ぎんは氾はん濫らんする洪おほ水みずの如ごと  
 二五 し。二五 其そはわが懼おそれし怖おそろしき事こと我われに起おこり、わ  
 二六 が憂うれいし事こと我われに臨のぞみたればなり。二六 我われは慎つししみ  
 二六 おりしに非あらずや、一七 黙もくしおりしに非あらずや、靜しずか  
 二六 に居おりしに非あらずや。しかも御おん憤い怒ど我われに及およべり。一八

福を云つていゝだけ。靈魂の存續すること  
 は、他の箇所では主張してゐる位であるから  
 それを否定するつもりはない。一九・二六  
 参照。一三) エジプトやアツシリアの記念碑  
 には、彼等の手に杖を持ち容赦なく打擲し  
 ている様が屢々描かれてゐる。一四) 苦しみ  
 の理由は、多くの人の知りたがつてゐる大  
 問題。一五) この三格は、また二〇節の「何  
 故與えられたるぞ」にもかかる。一六) その  
 徑は道なき地を走る。一七) 持物を悉く失ひ、  
 子等に死なれた時に。一八) この忍耐者と雖  
 もまだ新約の完徳を去ること遠い。彼はキ  
 リストの御苦しみの模範も、キリスト教的  
 十字架愛も知らなかつた。「我に苦しみか  
 死を！」という聖女大テレジアの語を思い  
 合せよ。

## 第 四 章

エリファズ、ヨブの不耐を責め、天主の罪なき者を苦しめ給うこと  
決して非ざる旨を主張す。

二一	一時にテマン人エリファズ、應えて云いけるは、 <small>三</small> 我等もし汝に語り
二	出さば、恐らくは汝悪しく思わん、さりながら、誰か心に抱ける事を
三	云わで已むべけんや。 <small>三</small> 視よ、汝は多くの人に教え、弱れる手を強く
四	し、 <small>四</small> 蹒跚く者を汝の言もて立ち直らせ、戦く膝に力を與えたり。
五	<small>五</small> 然るに今禍來りて汝を襲うや、汝力を落し、その汝に觸るるや
六	汝怖じ惑えり。 <small>六</small> 汝の敬畏、汝の剛毅、汝の忍耐、汝の道を全うする
七	こと、今何處にかある。 <small>七</small> 請う、憶いみよ、誰か罪なくして滅びし者
八	あらん、またいつ義しき者の絶やされしことあらんや。 <small>八</small> 却つて我見
九	しに、不義を働き、苦しみを播き且刈る者は、 <small>九</small> 天主の息吹によりて
一〇	滅び、その御忿怒の氣息によりて消え失せたり。 <small>一〇</small> 獅子の咆哮、牝

第四章 一) 汝は今  
まで他人には賢明  
な忠告を與えるこ  
とができたが、自  
分のためには適當  
な道がわからない  
汝がもし他人に云  
つたことをいつも  
實行していたら、  
この苦しきも汝に  
來なかつたである  
らに。一) 二) この説  
明によれば、苦し



一 獅子の聲絶え、若き獅子の牙折れ、<sup>1)</sup> 二 虎は餌食なくして滅び、  
 三 仔獅子は散々になれり。<sup>4)</sup> 三 また私かに<sup>5)</sup> 我に告げられし言ありて、  
 四 わが耳盗むが如くその叫きの微かなる聲を聞き取りぬ。<sup>3)</sup> 即ち深き睡眠の慣に人々を襲う頃、夜の幻の恐ろしさに、  
 五 我恐怖と戦慄とに襲われ、わが骨悉く震憾けり。<sup>2)</sup> しかして一陣の風わが前を過ぐるに當り、わが身の毛よだちぬ。<sup>6)</sup> 時に何者か、一つの像わが眼前に立ちしが我その顔を見知らざりき。  
 六 次いで我さながら微風の如き聲を聞けり、曰く、<sup>7)</sup> 天主に比べなば、人いかに義しからんや、人いかにその創造主よりも潔からんや。<sup>8)</sup> 一八 視よ、彼に事え奉る者と雖も、倒るることなきにしもあらず、主はその御使等にさえ邪曲なる点を見出し給えり。<sup>9)</sup> 一九 まして粘土の家に住み、<sup>8)</sup> 土を基とする者、いかに蠹魚に喰われし如く滅びざ

みはいずれも何かの悪に對する天主のお罰にほかならない。—3) 汝の以前の談話は、獅子か虎の吼聲のようであつたが、その獸も今は死んでしまつた。—4) ヨブとその家族等。—5) 以上を確證するために、エリファズは啓視を引用する。  
 6) 本二五・四。—7) 聖に堅められているように見えたのに、天使たちでも倒れた者があつた。—本一五・一五。彼後二・四。—8) 「粘土の家に住む者」とは、人体が粘土の家であるなら(智九・一五。哥後五・一。創二・七参照)、人間のことである



二〇 らんや。二〇 彼等は朝より夕までの間に<sup>9)</sup>  
 伐り倒され、誰も氣づかざるままに永く  
 滅び去らん。三 また遺れる者共<sup>10)</sup>も人々  
 の中より取り去られ、智慧なくして死す  
 べし。11)」

## 第 五 章

エリフアズ、ヨブに勧めてその非を認めしめんとて、なおも譴責を續く。

一 「果してもし汝に答うる者あらば、呼  
 びて見よ、また誰か聖なる者に向かえか  
 し、<sup>1)</sup> 二 實に憤怒は愚かなる者を殺し、嫉  
 妬は小人を悶死せしむ。<sup>2)</sup> 三 我は愚かなる  
 者の根を張るを見しが、直にその壯麗を  
 呪えり。<sup>4)</sup> 四 その子等は幸福を距ること遠

9) 束の間に。—10) ヘブレオ語本「實に彼らの紐解か  
 れん。」幕屋は生の象徴。幕屋をまつすぐに立てて  
 おく天幕の紐を解くとは、急死を意味する。—11) 智  
 恵のない、即ち無智の無智たる所以は、罪人が自分  
 の苦しみによる警告を受けながらも、改心しようと  
 しないこと。

第五章 1)「聖なる者」とは、ここでは天使を意味  
 する。一五・一五参照。—2) ヨブが自分に罪ありと  
 認めないので、彼を愚なる者とよぶ。

五 く、門もんにて蹂躪ふみにじられん、<sup>3)</sup> 誰たれも之これを救すくう者ものなかるべし。五その刈かり入れし物ものは飢うえたる者もの之これを食くらい、彼かれは武裝ぶそうせる者もの之これを捉とらえ、その富とみは渴かわける者もの之これを飲のまん。六世よに原因ゆえなくして起おこる事ことはあらず、苦痛くるしみは土つちより生しやうぜず。<sup>4)</sup> 七人ひとは勞苦らうくせん爲ため、鳥とりは飛とばん爲ために生うまる。八されば我われは主しゆに願ねがひ、天主てんしゆにわが言ことばをかけん。<sup>5)</sup> 九彼かれは大おほいなる事こと、測はかり難がたき事こと、不思議ふしぎなる事ことを、數知かずしれず行おこなひ給たまう。<sup>6)</sup> 一〇地ちの面おもてに雨あめを賜たまひ、萬物ばんぶつを水みづもて潤うるし、一卑ひくき者ものを高位たかきに置おき、嘆なげく者ものを引ひき起おこして幸福こうふくならしめ給たまう。二三彼かれは惡意あくいある者ものの謀計はかりごとを打破うちやぶり、その手てをして始はじめし所ところを遂とぐるこゝ能あたわざらしめ、一三智ち慧えある者ものをその自み分の奸計わるだくみに陥おとしれて捉とらえ、邪曲よこしまなる者ものの策謀はかりごとを打破うちやぶり給たまう。<sup>7)</sup> 一四彼等かれらは晝ひるも暗黒くらやみに逢あひ、正午まひるにも夜よるの如ごとくに模て索さぐせん。一五されど天主てんしゆは乏としき者ものを彼等かれらの口くちの劍つるぎより救すくひ、貧まぢしき者ものを暴虐ぼうぎやくなる者ものの手てより救すくひ給たまう。一六されば乏としき者ものには希望のぞみ

3) 裁判の行われる門の所で罪を白状させられ罰の宣告を受けるだろう。—4) 苦しみに意義のあることは明らかであるが、エリファズが思っているような意味ではない。—5) わたしがこの不幸に會つたとすれば、天主にお救しを願ひ求めるだろう。  
6) ヨブに信頼を起させるために、彼は天主の御力や、萬事における奇しき御攝理を述べるの哥前三・一九。

一七 あるべし、然れども不義はその口を閉じん。一七 天主の懲らし給う人は幸福なるかな、故に主の懲戒を拒むなかれ。  
 一八 其は主傷つけては治し給い、撃ち給いてはその御手癒すべければなり。一九 彼は六つの患難の中にて汝を救い給わん、第七の中にても災厄汝に及ばざるべし。9) 三〇 彼は汝を饑饉の時には死より、戦争の時には剣の手より救い給わん。三二 汝は舌の鞭<sup>10)</sup>より隠るるを得、災難來る時にも之を恐れざるべし。三三 汝は荒廢と饑饉との時にも笑うを得、地の獸をも恐れざるべし。11) 三三 却つて汝は土地の石<sup>12)</sup>と盟約を結び、地の獸等汝と和睦せん。三四 汝は己が幕屋の安穩なるを知らん、己が繁榮を見て、罪を犯すことなからん。  
 三五 汝はまた汝の胤の殖えに殖えて、汝の裔の地の草の如くなるを知らん。三六 汝は恰も麥束をその季節に當りて取り入

8) エリファズはヨブに、己の罪深いことを認めて、天主にお赦しと御憐憫とを願ひ求めるようすゝめる。1)の限りない度数をあらわすヘブレオ語の云い方。  
 麼一・三、六、九、一一。米五・五参照。10) 讒侮中傷を象徴的に「舌の鞭」という。11) 動物の中には作物の敵が澤山ある。例えば野獸(結一四・二一)、鼠(母上六・四以下)、蝗(耳一・四以下)、蟻(箴六・六一八)など。12) 石地には橄欖樹(本二九・六。申三二・一三)及び葡萄樹がそだつ。

二七  
 れたる如く、幸福に溢れて墓に入るべし。二七視よ、我等が探り究めたる所かくの如し。汝之を聞きて心に思  
 いめぐらすべし。13)」

### 第六章

ヨブ己が罪なきことを主張す。

二一  
 一時にヨブ答えて云いけるは、三願わくはわが御憤怒  
 に値したる罪<sup>1)</sup>と、わが蒙りつつある災難との、秤に  
 かけられんことを。2) 三さらば是は海の砂よりも重き  
 こと明らかにならん、この故にわが言悲哀に満てるな  
 り。3) 四夫れ、主の矢<sup>4)</sup>は我に命中り、その御忿怒<sup>5)</sup>  
 はわが靈魂を呑み盡し、主を恐るる念我を攻む。五野  
 驢馬いかで草あるに鳴くことあらんや、また牛いかで  
 満てる抹槽の前に立ちて吼ゆることあらんや。6) 六味い

13) 長い間考察して三つの友を發見したから、汝の改心に役立てよ。

第六章 1)ヘブレオ語本「わが短氣」。

2) 一方には彼の苦しみ、他方の皿には彼の苦情を入れて。— 3) 私の苦しみ悲しみは、いくら怨み言を列べても云い盡せぬほどひどい。— 4) 天主が苦しみを與え給うのは、人間に攻めかかり給うようなもの。— 5) ヘブレオ語本「彼らの毒」。矢に毒をぬるのは大昔からの慣わし。— 6) わたしに苦しみさえなかつたら、不平も云わないのですが。



一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七
<p>一五 わが兄弟は、谷間を奔り過ぐる溪流の如く、わが傍を通り過</p>	<p>一四 己が友を憐まずなりし者は、主を畏るる念を失いしなり。<sup>11)</sup></p>	<p>一三 力は石の力にあらず、わが身は青銅にあらず。<sup>10)</sup> 視よ、我に助</p>	<p>一二 我堪えんや、わが終いかなればとて我耐え忍ばんや。<sup>10)</sup> 二 わが</p>	<p>一〇 手を擴げて我を斷ち給わんことを。一〇 ただ苦しきもて我を責め</p>	<p>九 しむるは誰ぞや。<sup>8)</sup> 願わくは、始め給いし者、我を滅ぼし、御</p>	<p>八 かなえられ、わが待望めるものを天主より我に賜わることを得</p>	<p>七 物を、人いかで味うを得んや。七 前にわが心の觸るるを欲まざ</p>

の塩が極く僅か足りなくとも、すぐ舌は氣づく。私がこんなひどい禍を、どうして感ぜずにおられましようか。一〇 願いの内容は九節にある。天主に死を求め願ひ。しかし天主がそれをかなえて下さらないなら、それに服するつもり。将来はよくなるというエリファズの慰めに對する答。一〇 汝らは主を畏るる念がないと云つて我を非難したが、それは寧ろ汝らの方のことだ。

一六 ぎたり。一六そは霜を恐れ、雪之に降りかからん。<sup>12)</sup>

一七 散じたる時には失せ、熱くなりてはその處より消

一八 え去らん。一八彼等の辿る小徑は錯綜みたり、彼等は

一九 徒勞に歩みて滅ぶるに至らん。<sup>13)</sup> 一九テマ<sup>14)</sup>の小徑、

二〇 サバ<sup>15)</sup>の旅路を眺めて、少時待つべし。二〇我希望を

有てるに由りて、<sup>16)</sup> 彼等恥じたり、彼等も亦わが許

二一 まで来りしが、恥辱に蔽われたり。二一今や汝等来れ

二二 り、しかしてわが災禍を見たるのみにて恐れたり。<sup>17)</sup>

二三 我曾て云いしことありや、<sup>18)</sup> 汝等の所有物の中よ

二三 り、持ち来りて我に與えよ。<sup>19)</sup> 二三また<sup>20)</sup>敵<sup>18)</sup>の手

二四 より我を救い、力ある者の手より我を挽ぎ放て。<sup>21)</sup>

二四 と。二四我に教えよ、さらば我黙せん、もしわが知ら

二五 ざる事あらば、我に知らせよ。<sup>19)</sup> 二五汝等の中に、我

12) 旅人が水を要することの少い春に。

13) 旅人が水をほしがる夏に。——14) テマ

(創二五・一五。耶二五・二三参照)

とは、イスマエルから分れた族の一つ

で、商賣をしながら、エドムやアラビ

アの荒野の隊商の道を通つた。——15) ア

ラビアの荒野の北にいたベドウィン族

16) ヘブレオ語本によれば「彼ら望みし

によりて」。——17) 汝らは我を慰めに來た

しかしその代りに我を非難してわが靈

肉の苦痛をいや増した。——18) 悪魔や意

地悪い人々など、我をかゝる不幸に陥

れた者。——19) 我が善き教を奉じようと

しないと思ふなかれ。わが行狀の謬り

やよくない所があれば、教えよ。さら

ば之を改めよう。だがエリファズの推

量したよるな罪は、我は犯したことが

ない。

二六 言を枉げしや。汝等はただ譴責せん爲に言を調うるのみ。汝等は風  
 二七 に對して語るなり。20) 汝等は孤兒に襲いかかり、汝等の友を倒さん  
 二八 と努むるなり。然れども汝等、その始めし所をなし遂げよ、耳を聳  
 二九 て、わが僞れるかを視よ。乞う、諍うことなく答え、正しき事を語  
 三〇 りて是非せんことを。さらば汝等わが舌に不義を見出さざるべく、  
 またわが口に愚なること出でざるべし。」

## 第七章

ヨブ人生の悲惨を説き、天主に向かいて語る。

一 地上における人の生涯は戦役にして、その日は備われ人の日の如し。  
 二 奴僕が日蔭を望むが如く、備われ人がその仕事の終るを待ちかぬる  
 三 が如く、我も亦空しき月を経、わが身に勞多き夜を算えたり。我  
 四 眠らんとする時には、何時起き出すを得んか。と云い、また夕

20) ヘブレオ語本  
「わが言汝らに風  
となりて當るな  
り」すなわち汝ら  
は一向それに注意  
しない。

第七章 1) 雇人に  
は毎日賃銀が渡さ  
れる。(利一九・  
一三)



五 を待ち、苦痛に満たされて暮に及ぶ。<sup>2)</sup> 五 わが肉は腐敗と塵の汚  
 六 れとを纏い、わが皮は萎び縮みたり。<sup>6)</sup> わが日は糸の機織工に  
 七 断たるるよりも速かに過ぎ去り、何の希望もなくして盡きたり。  
 八 わが生命は氣息に過ぎず、わが眼再び幸福を見ざるべきを憶  
 九 い給え。<sup>8)</sup> 人見るとも我を認め得じ、汝の御眼我を求むとも我  
 一〇 最早あらしじ。<sup>9)</sup> 九 雲の消え失せ過ぎ去る如く、冥府<sup>4)</sup> に下りたら  
 一 一 人者は上り來ることなからん。<sup>10)</sup> また彼は累ねてその家<sup>5)</sup> に歸  
 二 らず、そのおりし處最早彼を知らざるべし。<sup>11)</sup> 二 されば我はわが  
 三 口をつぐまじ、わが精神の惱の裡に語い、わが靈魂の苦しきも  
 四 て語らん。<sup>12)</sup> 三 汝我を獄に閉じこめ給いしは我が海なる故にや  
 五 鯨なる故にや。<sup>13)</sup> 四 我の<sup>14)</sup> わが床我を慰め、わが臥床の獨語に  
 六 我心をやらん。<sup>15)</sup> 五 と云う時に、<sup>16)</sup> 汝夢もて我を恐れしめ、幻も  
 七 て我を愕かし給わんとす。<sup>17)</sup> 六 この故にわが靈魂は縊死を、わが

2) 晝には、夜が來て苦痛のやわらぐのを待つ。夜にやわらぐと、晝が來ればと期待する。 3) 天主が生ける人々の中を見まわしてお探しになつても、もう見當らない。  
 4) ヘブレオ語「セオール」死者のすみか。 5) 家は、現在の生の有様。 6) こんな短かい自分の一生をただ苦しきばかりで満たし給わぬように、という願い。 7) 私は束縛されなければならぬほど有害なものですか。



一六 骨は死を擇ぶなり。一六 我は希望を失えり、我今は最早  
 生くるを欲せず。我を捨ておき給え、わが日畢竟無な  
 ればなり。一七 人は如何なる者なれば、汝かくは之を重  
 んじ給うや、また何故に汝御心を之に留め給うや。8)  
 一八 汝朝未明に之を訪れ、俄かに之を試み給う。一九 何時  
 まで汝我を容赦し給わず、唾呑む暇もの。我を措き給わ  
 ざるや。二〇 あゝ人を護り給う者よ、我罪を犯せり、我  
 汝に何をか爲すべき。汝何故に我を汝の敵となし、我  
 にわが身を重尙たらしめ給いしぞ。二一 汝何故わが罪を  
 除き給わざるや、何故わが不義を赦し給わざるや。10)  
 視よ、我今塵の中に眠らん。汝朝に我を探し給うと  
 も、我在らざるべし。11)」

8) 主は人間をこのように卓れた被造物に造り給いながら、なぜ私をかよ  
 うな苦痛の裡に棄ておき給うのです  
 か。詩八・五参照。1) 今なおアラ  
 ビア人の間に使われている諺的な云  
 い方で、非常に短い時間をあらわす  
 語。「一瞬の間も、片時も」の意。  
 10) もし私が罪を犯したためにこんな  
 艱難を受けたのなら、御憐憫の豊か  
 な愛深い天主として赦して下さいの  
 が當然でありませんか。それで私は  
 こうお願いします。11) 本章八節参  
 照。

第八章

バルダド天主の正義を擁護する如く装いてヨブを責む。

一時にスへ人バルダド答えて云いけるは、

三 何時まで汝かかる事を語り、汝の口の言烈

しき風<sup>1)</sup>の如くなるや。 天主いかで審判を

枉げ給わんや、全能なる御者いかで正しき事

を歪め給わんや。 汝の子等彼に罪を犯し、

彼、彼等をその不義の手に委ね給えりと雖

も、<sup>3)</sup> 汝もし朝未明に起き出で、天主に向か

い、全能なる御者に祈願し、 清く正しく歩

まば、彼直に汝を見守りて、汝の義しき住處

を安穩ならしめ給わん。 かくて汝の始は小

なりとも、汝の終は極めて大いなるものとな

第八章 1) 原語「spiritus」第一義「息吹」第二

義「生命」第三義「靈」第四義「風」(創八・

一。約三・一八など参照)。 2) バルダドの云う

こともエリファズと同様、即ち天主が患難を下

し給う唯一の原因は罪である。故に自分はこん

な大きい患難を受けるような罪を犯したことが

ないというヨブの主張は、天主の御正義に背く

ものであるというのである。 3) 汝の子等の罪

は死に値するほど大きかつた。汝がまだ生かし

ておかれているのを見れば、汝の罪はそれほど

大きくなく、それを償う機会がまだ與えられて

いるのだ。 4) 屢々出てくるヘブレオ語の云い

方で 事を果たす迅速さをあらわす。

八 べし。試こころみに前代さきのよの人に問え、また勉つとめて父祖ふその思おもい出でを探さぐれ、  
 九 (蓋けだし我等われらは昨日きのうより在あるに過すぎずして、我等われらが世よに在ある日の影かげの  
 一〇 如ごときを知らざるなり。一〇 然しからば彼等かれらは汝なんじに教おしえ、汝なんじに語かたり、その  
 一一 心こころより言ことばを出いださん。一二 藺草いぐさ 濕氣うるおいなくして豈あに緑みどりなるを得えんや、葦あし、  
 一二 水みずなくして豈あに生育そだつを得えんや。一三 そはなお花はなありて、手てもて摘つま  
 一三 ざる間うちに、すべての草くさに先立さきだちて萎しぼるるなり。一四 凡およそ天主てんしゆを忘わする  
 一四 者ものの道みちも亦またかくの如ごとく、偽善者ぎぜんしやの希望のぞみは失うせ去さるべし。一四 其その  
 一五 愚おろかさば彼かれを益えきせず、その信賴しんらいは蜘蛛くもの巢すの如ごとくならん。一五 彼かれ其その  
 一六 家いえに倚よりかからんとするに、家立いえたちおらず、之これを支さえんとするも、  
 一七 保たもたざるべし。一六 彼日かれひ出いずる前まえには瑞々みずみずしく見みえ、その昇のぼる時ときには  
 一八 芽めを出いだし、一七 其その根ねを岩いわの堆やまに蔓はびこらせ、石いしの中うちに留とどまらん。一八 其その  
 一九 れど人ひと之これを其その處ところより取とり去さらば、其その處ところは之これを否いなみて、我われ汝なんじを知し  
 一九 らず。と云いうべし。一九 夫それ、他たの者もののまた地ちより生しょうずるは、是これ、

5) 本一四・二。詩一  
 四三・四。一6) エジ  
 プトに澤山あり、パ  
 レスチナにも見られ  
 るパピルス(紙草)  
 らしい。一7) 一一一  
 一九節は譬えによる  
 古の賢人の答。  
 8) 活ける水の源なる  
 天主から離れた人々  
 の象り。一9) 偽善者  
 という語は、ヨブの  
 犠牲をさしている。  
 本一・五参照。  
 10) 根枝を出しても岩  
 地では根を張ること  
 ができない。一11) 彼  
 よりも應わしい他の

二〇 彼の道の歡樂<sup>12)</sup>なり。二一 天主は素直なる者を棄て給<sup>たま</sup>わす、また悪しき者に御手を差伸べ給<sup>たま</sup>わず、<sup>13)</sup> 二二 汝の口の笑に満たされ、汝の唇の歡喜の叫びに満たさるるまで然なし給<sup>たま</sup>わん。二三 汝を憎む者は恥辱に覆われ、悪しき者の幕屋は保たざるべし。」

### 第九章

ヨブ天主が屢々罪なき者を苦しめ給うと雖も、なおその義しく在すを認む。

人に取つて代られる。黙二・五参照。  
 12) 天主を蔑する者の行きつく果てを、皮肉に歡樂と云う。—13) ヨブはまだ生きてゐるから、その苦しみは癒し得る苦しみである。その罪さえ改めれば、幸福になるだろう。

二一 一ヨブ答えて云いけるは、二 實に我はその然るを知り、また天主に較べて人を義しとすべからざるを知る。三 人もし彼と諍わんとせば、千の中一つも之に答うることに能わざるべし。四 天主は御心賢く御力強く在し給う、誰か能く之に抗いて安きを得たる者あらんや。五 彼は山をも移し給いぬ、されどその怒りて

**第九章** 1) ヨブは自分の無辜を確言しても大主の不當を咎めるつもりはない。「私は汝らの云う意味での罪人ではないが、天主の聖徳にくらべたら罪なしとは云われない。」四・一七及び二五・四参照。



六 顛倒し給いし者共は之を知らざりき。<sup>2)</sup> 六 彼、地をそ  
七 の處より移動かし給うに、その柱<sup>3)</sup> ゆらぐ。七 彼日  
八 に命じ給えば、<sup>4)</sup> 日昇らず、またさながら封印する  
九 が如く星辰を閉込め給う。<sup>5)</sup> 八 彼ただ獨り天を擴げ。<sup>6)</sup>  
九 海の波の上を歩み給う。九 彼はアークトゥルス、オ  
一〇 リオン、ヒアデス、及び南方の見えざる星座<sup>7)</sup> を創造  
一〇 り給う。一〇 その大いなる御業、了り得ざる御業、不  
一一 思議なる御業を爲し給うこと數知れず。二 彼わが許  
一二 に来り給うとも、我之を見ず、彼去り給うとも、我  
一二 之を知らず。<sup>8)</sup> 二 彼俄かに問い給わば、誰か能く之  
一三 に答えん、また誰か汝何とてかくはなし給うかと  
一三 云うを得ん。一三 彼は天主に在せば、誰もその御忿怒  
一三 に抗う能わず、地球を擔う者共<sup>9)</sup> もその下に屈す。

2) 例えば地震や山つなみの時。  
3) 我々の地球が、堅固な柱(山々の基)で支えられている宏大な構造のものに譬えてある。アトラスが地球を擔つていたという古の説を思い合わせよ。三八・六参照。4) 日蝕の時に。5) 雲で暗くするのはいわば閉じこめるのである。6) 聖書記者は天空を大きい巻物に譬えている。7) 北半球の地平線上に昇らぬ、それ故南半球の空に隠されている星座。8) 天主が我々において、また我々の周圍で活動し給うても一向我々が氣づかないのは、いわば我々が盲目の如くであるから。9) ヘブレオ語本「ラハブを助くる者共」即ち驕慢な思い上つた人々。傲慢を意味するラハブという語は、また時々海の怪物をさすにも使われる。

一四 然れば、我何者なれば彼に答え、之と言を交うるを得ん

一五 や。10) 我はたとい己に義しき事ありとするも、答うること

一六 をなさじ、却つてわが審判者に哀願せん。一六またよしやわが

一七 呼び奉る時彼の我に聴き給うことありとするも、我彼がわが

一八 聲を聞き給えりとは信ぜじ。11) 實に彼は旋風もて我を粉碎

一八 し、故なくとも12) わが傷を多からしめ、一八我が息を安むるこ

一九 とを許さず、我に苦き事を充満し給う。一九力を求めんか、彼

二〇 こそ最も力ある者なれ、審判の公義を求めんか、誰も敢てわ

二〇 が爲に證を立つる者なからん。二〇たとい我已を義しとなさん

二一 とすとも、わが口我を罪せん。たとい我わが身の罪なきを示

二二 さんとすとも、彼わが邪惡なることを證し給わん。13) 我正

二三 直なりとも、わが靈魂之をだに知らず、14) 我わが生を厭わん。

二三 わが云える所は一つに歸す、即ち彼は罪なき者をも惡しき

10) 私は自分の正しいことを識つていても、汝らの云うように、天主と争おうなどとは、夢にも思わない。

11) 我は主が聴き給うに値せぬ者である。—12) 私が理解し得ないような譯で。羅一

一・三三の「主の判定のさとり難さよ！」という語を思い合せよ。—13) 天主の御

前では私は罪人である。

14) 私は自分に罪がないと感じているが、もし天主が私を罪人と見給うなら、罪せらるべき者と思う。この罪ゆえに私は人生がいやになる。

二三 者をも共に滅ぼし給う。15) 二三 彼鞭打ち給う時には、俄かに殺  
 二四 し給えかし、罪なき者の苦罰を笑い給うことなかれ。二四 地は  
 悪しき者の手に與えられたり、16) 彼その裁判人の顔を蔽い給  
 二五 う。17) 彼に非ずば抑々誰ぞ。二五 わが目18) は飛脚よりも速かな  
 二六 り、逃げ去りて幸を見ざりき。二六 そは果實を搬ぶ船の如く、19)  
 二七 獲物に飛びかかる鷲の如くに過ぎ去りぬ。二七 我〃最早かく云  
 わじ。〃と、謂う時、わが顔色變りて、苦しみに苛まる。  
 二八 我は汝が罪ある者を容赦し給わざることを知るにより、わ  
 二九 がすべての行爲を懼る。二九 されど、然りと雖も、なお我惡し  
 三〇 とならば、我何ぞ徒らに勞したるや。三〇 我たとい雪水もてす  
 三二 る如く身を洗い、わが手いと潔く輝くとも、三二 汝我を汚濁に  
 三三 浸し給い、わが衣服我を厭うに至らん。三三 我は我に類する人  
 にも、審判の時に我と等しく聽かるるを得る者にも、答えざ

15) この世での苦しみの割り  
 當ては、個人の道德的いさ  
 おしの有無にはよらない。  
 16) 世界歴史の大なる事實は  
 苦しんでゐる者のあらゆる  
 不幸の原因は、その個人的  
 罪惡にあるというバルダド  
 の主張に對する反駁となる  
 17) 人間は決して正しい裁き  
 手ではない。—18) 一般のこ  
 とを述べてから、ヨブは自  
 分の運命のことに戻る。  
 19) ヘブレオ語本は「その走  
 ること葦舟の如く。」即ち  
 パピルス草の莖を編んだ、  
 矢のように速い輕舟の如く



三三 三三 両方を責め、両方に手を置き得る者はあ  
 るべし。<sup>20)</sup> 希わくは彼その杖を我より引き給い、彼  
 三三 三三 希わくは彼その杖を我より引き給い、彼  
 三四 三四 希わくは彼その杖を我より引き給い、彼  
 三五 三五 我は語  
 らん、彼を恐れじ、蓋は恐れては答うることを能わざ  
 ればなり。」

### 第十章

ヨブ己が患難を嘆き、救われんことを願う。

一 「わが靈魂は生を厭う、我わが身を責むる言を放た  
 二 ん、わが靈魂の苦しみの裡にて語らん。 我天主に  
 三 申さん、<sup>1)</sup> 我を罪し給うなかれ。汝何とて我をか  
 四 裁き給うや、我に告げ給え。<sup>2)</sup> 汝我を責め、汝の  
 御手業なる我を虐げ、悪しき者の策謀を助くるを善  
 しと見給うや。 抑々汝に肉眼ありや、即ち汝人の

<sup>20)</sup>「或人に手を置く」とはその人を思  
 いの儘にする意。 —<sup>21)</sup>しかし私は罪の  
 心配がなく、天主に信賴の念を以てお  
 話しできるように、罰の筈を私から引  
 いて下さることをお願いする。

第十章 1)ヨブはこれから天主御自身  
 を相手にして語る。 —2)ヨブは自分の  
 苦しみの眞因を明かして下さるよう、  
 天主にお願いする。



五 見る如くに見給うや。五 汝の日は人の日の如くなりや、汝の年は人の時  
 の如くなりや、六 かく云うは、汝わが不義を索め、わか罪を探り給えば  
 なり。七 されど汝は知り給う、我は何も悪しき事を爲さず、また誰も汝  
 の手より救い得る者なきなり。八 汝の御手は我を作り、わが周囲を悉く  
 形成り給えり、然るに汝俄に我を突落し給うや。九 請う、憶い給え、  
 汝我を粘土の如く作り給い、しかも我を塵に歸らしめんとし給うを。  
 一〇 汝我を乳の如くに注ぎ、チーズの如くに凝固まらしめ給いしに非ず  
 や。四 二 汝は皮と肉とを我に着せ、骨と筋とにて我を組立て、三 生命と  
 恩恵とを我に興え、且目をかけてわが呼吸を保ち給えり。三 汝之を御心  
 に秘しおき給えども、我なお汝の一切を記憶し給うを知る。五 一 我罪を  
 犯したりとも、汝少時我を容赦しおき給うならば、何故我をしてわが不  
 義より潔めらるるを得しめ給わざるぞ。一五 我もし悪しからば、我は禍  
 なるかな、されど我たとい義しくとも、艱難悲惨満てるに由りて、頭を

3) 人間を創造し  
 保ち給う天主が  
 人間の不幸や滅  
 びを喜び給うこ  
 とはある筈がな  
 い。一四) 母胎内  
 に人間を形成し  
 給うは天主であ  
 る。一五) 天主の  
 慈しみ深い御攝  
 理に對するヨブ  
 の信仰。

一六 擧げじ。高慢ゆえにの 汝我を牝獅子の如くに捕え、

一七 また來りて我を驚くばかりに苦しめ給う。汝は證す

一八 増し給い、苦痛我を攻む。如何なれば汝我を胎内よ

一九 かりしならば、よかりしならん。さらば我は胎より

二〇 に。わが目數少ければ、やがて果つるに非ずや、さ

二一 れば我を措きて、わが苦しみを少しく嘆かしめ給え。

二三 我は、暗くして死の霧に蔽われたる地に行きて、ま

二四 た歸ることなければ、その前に然なさしめ給え。

二五 三 そは悲惨暗黒の地にして、死の蔭あり、秩序なくし

二六 て恒久に恐怖の住する所なり。10)

6) 私の地位が高いために。ヘブレオ語本「もしそれ（わが頭）が擧がらば」。ヨブは天主に形づくられた人間を牝獅子に譬え、主が之を苦しめて捕え、以て御自分のものとし給うように述べている。1) 罪ゆえの天主の御怒りの證人とは苦しみのこと。8) 少しは息がつけるように。9) 帰ることなき地に行くとは、死ぬこと。10) 冥府（よみ）はヘブレオ語で「セオール」と云い天國地獄の區別なき死後の世界。ヨブは今天主の御怒りを蒙つていたので、死後喜びの國に行けそらな見込は殆んどないと思つている。

# 第十一章

ソファアル、ヨブが己を義しとしたりとて之を責め、痛悔を勸む。

一 ナーマ人ソファアル乃ち應えて云いけるは、<sup>1)</sup>「多く語る者、  
 また聞かざるべけんや、言多き人、豈義とせられんや。<sup>3)</sup>獨  
 り汝に向かいてのみ、人々黙すべけんや、汝他を嘲りたるに  
 誰も詰らずして已むべけんや。<sup>4)</sup>實に汝は云えり、<sup>2)</sup>わが言  
 は純し、我は汝の眼の前に潔し。<sup>5)</sup>と。されば我は願う、  
 天主汝と語り、汝に向かいてその御唇を開き、<sup>6)</sup>智慧の秘  
 密とその法の多様なることを汝に示し給わんことを、さら  
 ば汝彼の求め給う所、汝の不義の値するよりも遙かに少きを  
 曉らん。<sup>7)</sup>汝天主の御足跡を解し、全能なる者を全きまで究  
 めんとするか。<sup>8)</sup>彼は天よりも高く在す、汝何をか爲し得  
 ん、冥府よりも深く在す、<sup>4)</sup>汝いかにしてか知り得ん。<sup>9)</sup>そ

**第十一章** 1) ヨブの嘆きに深い意味が籠つているのも悟らず、三番目の話し手ソファアルは嚴しい非難を以てそれに應える。—2) 汝に罪を認めさせようと。—3) 啓示された事に関してすら、まだ秘められていることがあるほど、「天主の高大なる智慧」は深遠を極めてい  
 る。—4) 地下の深い所にあるという、死者の住處、すなわちセオール(よみ)。

一〇の量は地よりも長く、海よりも廣し。<sup>5)</sup> 一〇彼一切を覆し、  
 之を一つに握り締め給う時、誰か抗することを得ん。<sup>6)</sup>  
 一一實に彼は人の空しき事を知り給う、豈不義を見て之を御  
 心に留め給わざらんや。一二空しき人は傲り高ぶりて、野驢  
 馬の仔の如く自由に生れたりと思ふ。一三されど汝は心を  
 堅うし、彼に向かいて汝の手を伸べたり。<sup>7)</sup> 一四汝もし汝の  
 手にある不義を己より去り、汝の幕屋に不正を留めずば、  
 一五その時には汝汚点なき面を擧ぐるを得べく、確乎として  
 恐るることなかるべし。<sup>8)</sup> 一六汝はまた悲慘を忘れ、之を記  
 憶するもただ過ぎ去りし水の如くなるべし。一七しかして眞  
 晝の如き光輝、夕に及びて汝に昇らん。また汝希望盡きた  
 りと思ふ時にも、曉の明星の如くに輝き出でん。一八かくて  
 汝前途に希望あるに由り心安んじ、坑に入りて<sup>9)</sup> 安らかに

5) 物質的なものの上下左右四方へのひろがり。1) 天主の御力でも、ヨブを沈黙させてほしいのヴルガタではこの行爲を既成の事實の如くに述べてあるが、ヘブレオ語では將來行われるものとしてゐる。曰く「汝もし彼に向かいて心を定め汝の手を伸べんか。」1) 8) 將來は幸福になると云う約束も、ヨブがどこを改めていいかわからぬのに、もし改めたらという條件付なので、一向慰めにならない。1) 9) 現代の戦争における塹壕や防空壕を思い合せよ。



一九 眠らん。一〇 汝を憐れむを得ん、誰も汝を愕かす者なく、汝の面を請う  
 二〇 者多かるべし。1) 二〇されど悪しき者の眼は失明し、彼等の遁るる  
 所なくなり、その希望は靈魂の厭うものたるべし。」

## 第十二章

ヨブ、ソファルに答え、且天主の御力と御智慧とを賞揚す。

一 時にヨブ答えて云いけるは、三 然らばただ汝等のみ人<sup>1)</sup>にして  
 智慧は汝等と共に死するにや。 三 我にも亦汝等の如く心あり、我  
 とて汝等に劣れる者にあらず。 抑々汝等の知る所、誰か之を知ら  
 ざらんや。 四 我の如く己が友に嘲らるる者は、天主を呼び頼むべ  
 く、彼之を聽容れ給わん。 蓋し義しき者の素直は嘲笑わる、<sup>3)</sup> 五 そ  
 は富める者の考えにては輕蔑すべき燈火なれども、定めの時<sup>4)</sup>の爲  
 に用意せらるるなり。 六 強盜の天幕は物に充溢る、しかも彼等は  
 天主がその手に一切を與え給えるに、厚顔しくも之を激せしめ奉

10) 利二六・六。

### 第十二章 1) 悟性を具

えた。— 2) 本一三・二。

3) 箴一四・二。— 4) ヴ

ルガタは、試鍊の裡に  
 ある義人は、傲慢な者  
 には輕蔑されるが時來  
 らば天主に輝かされる  
 燈火である、という一  
 般的原理を述べる。

七 試こころみに獸けものに問え、さらば汝なんじに教えん、空そらの鳥とりに問え、さらば汝なんじに告げん。八 地に云え、さらば汝なんじに答えん、また海うみの魚うおも汝なんじに物語らん。

九 主しゆの御手みての是等これら萬物ばんぶつを作りしこと、誰たれか之これを知らざらんや。一〇 生きとし生ける物ものの生命いのちも、人ひとの肉みの至すべての呼吸いきも、その御手みての中うちにあるなり。二 耳みみは言ことばを聞きわけざらんや、食しよくする者ものの口くちは味あじを辨わきまえざらんや。三 老いし者ものには智慧ちえあり、長壽ながいきの者ものには賢慮けんりよあり。四 智慧ちえと力ちからとは彼かれにあり、彼かれはまた思慮しりよと分別ぶんべつとをも有ゆうし給たまう。五 彼毀かれこぼち給たまわんか、建て

得うる者ものなく、彼人かれひとを閉込とじこめ給たまわんか、開ひらき得うる者ものなし。六 彼水かれみづを止とどめ給たまわんか、すべての物もの乾燥かんそうし、彼之かれこれを出いだし給たまわんか、地ちを滅ほろぼすに至いたる。七 力ちからと智慧ちえとは彼かれにあり、彼かれは欺あざむく者ものをも、欺あざむかるる者ものをも知しり給たまう。八 彼は評議ひやうぎする者ものを愚おろかなる結論けつろんに導みちびき、裁さばく者ものをして茫然ぼうぜんたらし

九 王等おうたちの束帶そくたいを解とき、繩なわもてその腰こしに帶おびせしめ、一〇 司祭等しさいらの榮譽えいよを剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

を剥はぎ、一一 貴族等きぞくらを倒たおし、一二 眞實まことを云いう者ものの唇くちびるを變かえ、老いし者ものの知識ちしき

5) 支配力の下に。  
6) 本三四・三。  
7) 天主。――8) 養  
二二・二二。本  
三・七。――9) 人  
を知り給う故に  
その志す目的に  
その行爲を導き  
給う。――10) 王位  
にある人々のし  
るし。――11) ヘブ  
レオ語本「司祭  
たちを裸かにし  
て」即ち祭服を  
脱がせて。

二 を取除き、<sup>二</sup>諸侯に侮蔑を注ぎ、<sup>三</sup>虐げられたる者を救  
 い、<sup>三</sup>暗き中より深き事を顯し、<sup>四</sup>死の蔭を光に引出  
 し、<sup>12)</sup> <sup>三</sup>國々の民を殖やし、<sup>五</sup>また之を滅ぼし、<sup>六</sup>その倒  
 れたる後、<sup>七</sup>再び之を回復し、<sup>八</sup>地の民の長等の心を變  
 えて之を迷わせ、<sup>九</sup>以て道なき所を徒らに歩ましめ給う。  
<sup>二五</sup> <sup>一</sup>彼等は恰も暗黒にありて光明にあらざる如く、<sup>二</sup>模索  
 するに、<sup>三</sup>彼之を酔える者の如くに迷わしめ給う。<sup>13)</sup>

### 第十三章

ヨブなおも己が罪なきことを主張し、友等を責む。

一 視よ、この一切の事を、我わが目に見、わが耳に聞  
 きて、<sup>1)</sup> 悉く了れり。<sup>二</sup>汝等が知る程には、<sup>三</sup>我も亦知  
 る、<sup>四</sup>我は汝等に劣らず。<sup>五</sup>然れども我は全能なる者に  
 向かいて語り、<sup>六</sup>天主と論ぜんことを望む。<sup>七</sup>我先ず汝

12) 人間の知識の及ばぬよみの國も天  
 主の御目には見通しである。本三・  
 五参照。— 13) 世界の支配は天主の御  
 力と御智慧とによつて行われている  
 故に何事もたゞ正義のみを標準とし  
 て測るべきではない。

第十三章 1) 彼は天主の世界支配の  
 正しい概念を得るために、被造物を  
 眺め(一二・七一—一〇)、賢人達の  
 箴言を聞いた(一二・一三以下)。  
 2) 苦しみの原因についての汝らの知



等が虚を構うる者にして邪説を奉ずる者なることを示さ

ん。五請う、汝等黙せよかし、これ、賢き者と思われんた

めなり。六この故に汝等わが咎むるを聴き、わが唇の是非

する所に注意せよ。七天主豈汝等の虚言を必要とし、彼の

爲に虚偽を語らしめ給わんや。八汝等彼の意を迎えて、そ

の爲に是非せんと努むるか。九果してそは何事も隠るこ

となき彼の御意に適うや。彼豈人の如く、汝等の虚構に欺

かれ給わんや。一〇汝等ひそかに彼の意を迎うるに由り、彼

汝等を責め給わん。一〇二彼起ち給わば、直に汝等を怖惑わ

しめ給わん、かくて彼を恐るる念、汝等を襲わん。一三汝等

の記憶のは灰に譬うべし、汝等の頸は粘土に返さるべし。一

三汝等少時黙して、何にてもわが心に浮かぶ事を我に語ら

しめよ。一四我何ぞわが齒もてわが肉を挽ぎ取り、わが靈

識は、私と同様不十分である。我々はそれを説き明して下さるよう天主にお願いせねばならぬ(三―四節)。一三不幸な者は常にまた罪人でもある、という友の主張は嘘である。一四苦しきはたゞ罪の結果に過ぎないという主張をして、汝らは天主に迷惑をおかけした。一五汝らは明らかにそらと意識していないが汝らが組んで我に當ることは真理に合わない。一六汝らのさす言葉。一七ヘブレオ語本「汝らの塞はたゞ土のみ。」一八どうして私は、猛獣が喰い殺した獲物を弄ぶように、命をおもちやにしてよかるるか。

識は、私と同様不十分である。我々はそれを説き明して下さるよう天主にお願いせねばならぬ(三―四節)。一三不幸な者は常にまた罪人でもある、という友の主張は嘘である。一四苦しきはたゞ罪の結果に過ぎないという主張をして、汝らは天主に迷惑をおかけした。一五汝らは明らかにそらと意識していないが汝らが組んで我に當ることは真理に合わない。一六汝らのさす言葉。一七ヘブレオ語本「汝らの塞はたゞ土のみ。」一八どうして私は、猛獣が喰い殺した獲物を弄ぶように、命をおもちやにしてよかるるか。



一五 魂をわが手に携えんや。一五 彼たとい我を殺し給うとも、我  
 彼を待み奉らん、但その御眼前にてわが道を明らかにせん。10)  
 一六 彼はわが救主となり給わん、蓋は善を装う者その御眼前に  
 一七 來ること能わざればなり。一七 汝等わが言を聽け、奥義11)を汝  
 一八 等の耳に留めよ。一八 我もし審判かれんか、必ず義しと認めら  
 一九 るべきを知る。一九 我と共に審判を受けんとする者は誰ぞ、來  
 二〇 らば來れ、我何ぞ黙して破滅を俟たんや。二〇 ただ二つの事を  
 我に爲し給うなかれ、さらば我汝の御面前より逃げ隠れじ。  
 二一 三 汝の御手を我より遠く引き給え、12) 汝を恐るる念に我を愕  
 二三 かし給わざれ。13) 三 汝我を呼び給え。我汝に答えん、然らず  
 二四 ば我語らん、汝我に答え給え。三 抑々我に幾何の不義と罪あ  
 二五 りや、わが悪事と科とを我に示し給え。二四 如何なれば汝御面  
 を隠し、14) 我を汝の敵と思ひ給うや。二五 汝は風に吹き去らる

9) たまのおを手に携うとは  
 命を非常な危険に曝すこと  
 (尤一二・三。母上一九・  
 五)。—10) 私はず、主の御  
 前における私の行狀が正し  
 かつたことを示すだけ。  
 11) 奥義の謎とは、彼が大罪  
 もないのにひどく苦しんで  
 いること。—12) 苦しみを下  
 す汝の御手を少しく引き給  
 え。—13) 汝の御威光と聖徳  
 とによつてではなく、普通  
 の人間として我を裁き給え  
 14) 天主の御面とは恩寵。御  
 面を隠すとは御好意をもは  
 や示し給わぬこと。

二六 木の葉に對いて御力を示し、枯れたる莖を追ひ給う。二六 實に汝は我に不利なる苦き事どもを録し、わが若き日の罪<sup>15)</sup> 故に我を滅ぼさんとし給う。二七 汝はわが足を足械に嵌め<sup>16)</sup> わがすべての道を見まもり、わが足の歩みを窺ひ給えり。二八 我は腐れたる物の如く、また蠹に喰わゆる衣服の如くに朽ち果つべき者なり。<sup>17)</sup>」

### 第十四章

ヨブ人生の短かきを述べ、復活を信ずる旨を言明す。

一 「女より生まるる人は、東の間の生命にして、數々の悲惨に満たさる。<sup>1)</sup>」ニそは花の如くに出で來りて蹂躪られ、影の如くに過去りて片時も同じ状態に留まることなし。<sup>2)</sup> 三 汝かかる者に汝の目を開き、之を汝の御許の審判に引出す價值ありと思ひ給うや。<sup>四</sup> 穢れたる胤によりて孕れる者を、誰か潔くする

15) 無知と無分別とで犯した罪。 — 16) 私が動けないように。 — 17) この云い方は象皮病に蝕まれた體の恐ろしい様をよく現している。

第十四章 1) 彼の特殊な不運の上に、まだ人間の身分に付きものの不幸が加わる人生は概して始も中も終も悲しいものである。 — 2) 本八・九。詩一四三・四。

五 を得んや、<sup>3)</sup> そはただ獨り、汝のみにあらずや。<sup>4)</sup> 五人の日は短く、その  
 六 月の数は汝により、汝その限界を定め給えば、之を越ゆる能わず。<sup>六</sup> 少  
 七 しく彼を離れ、之をして、備われ人の如くその望みおる日の來るまで、  
 八 休ましめ給え。木には希望あり、たと切らるとも、また緑みてそ  
 九 の枝を出す。八たといその根地の中に老い、その幹塵の中に枯るとも、  
 一〇 水の濕に逢わば芽ぐみて葉を出すことさながら始めて植えたる時の如  
 一一 し。一〇されど人死して、裸かにされ、消え失せたる時は、抑々何處に在  
 一二 りや。二恰も水海より退き、河涸れて乾くが如く、<sup>5)</sup> 三人も亦眠りたら  
 一三 ん曉にはまた起きず、天の滅び去るまでの眼覺めず、その睡眠より起き  
 一四 出でざるなり。二三わが爲に汝をして、黄泉にて我を庇わしめ、汝の御忿  
 怒の過ぎ去るまで、我を隠さしめ、且我に對し汝の我を憶い給わん時を  
 定めしむる者は誰ぞ。一四 思い給わずや、死したる人、豈生き返ることあ  
 らんや。我は今戦いおれど、そのいつの日にもわが變化の來るまで待望

<sup>3)</sup> ヨブは原罪を信じていることをかく云いあらわす。―<sup>4)</sup> 詩五〇・七。―<sup>5)</sup> 水の乾あがつた河床。―<sup>6)</sup> 世の終りまで。一九・二五に、天地の過ぎ去る(マテオ二四・三五)世の終りにおける復活への信仰が明らかに述べてあるのを見よ

一五 汝我を呼び給わん、その時我汝に答え奉らん。汝  
 は御手に作られたるものに、御右手を差し伸べ給わん。一六 實  
 に汝はわが歩みを算え給えり、されどわが罪を容赦し給え。<sup>7)</sup>  
 一七 汝はわが科を、恰も袋に藏めたる如くにして封じ給えり、  
 されどわが不義を癒し給いぬ。一八 山も崩れ失せ、岩もその處  
 より移る。一九 水は石を穿ち、地は洪水によりて徐々に削り去  
 らる。かくの如く汝人をも亡し給わん。二〇 汝永久に之を去  
 らしめんとて、少時之に力を賜えり。汝その面貌を變えて之  
 を追いやり給わん。二 彼はその子等の名ある者となるや、名  
 なき者となるやを知らざらん。<sup>8)</sup> 三 然れども生ける間その肉  
 痛むべく、その靈魂之を哭かん。<sup>9)</sup>

<sup>7)</sup> 本三一・四。三四・二二。  
 箴五・二一。一<sup>8)</sup> ヨブはま  
 だ諸聖人の通功についての  
 キリストの教を、殊に天國  
 の聖人達があとに残つた者  
 の幸福のために、もし天主  
 の御業の發揚とその御旨に  
 適うならば、配慮すること  
 を、知らなかつた。彼らは  
 天主の裡に後者の幸不幸を  
 見ているのである。



# 第十五章

エリファズまたヨブを責め、悪しき者の惨状を述ぶ。

一 テマン人エリファズ、また應えて云いけるは、<sup>1)</sup>「智慧ある者豈風に向かうが如く答えんや、豈その胃腑に熱きものを満たさんや。」<sup>2)</sup> 三 汝は汝に等しからざる御者<sup>3)</sup>を言もて責め、汝の益にならざる事を語る。 四 汝は汝の裡にある程の敬畏を棄て去り、天主の御前に祈ることをやめたり。 五 蓋し汝の不義汝の口に教え、<sup>4)</sup> 汝冒瀆者の舌に傲いしなり。 六 汝に罪ありと云うは汝の口にして、我にあらず。 汝の唇汝に答えん。<sup>5)</sup> 七 汝は最初に生れたる人なりや、丘に先立ちて<sup>6)</sup> 形成られたりや。 八 汝天主の御策謀を聞きたりや。その御智慧豈汝に劣らんや。 九 我等の知らざる所、汝何をか知る。我等の辨えざる所、汝何

第十五章 1)ヨブの教訓を解せず

して答える言葉。一つには無内容

であるとし(二、三、兩節)、ま

た一つには不敬虔僭越であるとし

て(四―六節)、彼は「不幸はた

ゞ大罪人にだけ臨む。」という自

分の前の諭しの主旨を一層詳細且

辛辣に再説する。(一八―三四節。)

2)熱き風とは、空しくしてしかも

激しきものの象徴。―3)天主。

4)ヨブの考え方のもとは彼の不義。

5)汝の悪しきことを立證するだるう

6)地球よりも前に。

一〇 をか辨わかりうる。一〇我等われらの中には年長としながの者もの、老いし者ものありて、汝なんじの父等ちちたちよ  
 二 りも遙はるかに高齡こうれいなり。二 天主てんしゆにとりて汝なんじを慰なぐさむるは大いなる事ことなり  
 二二 や。されど汝なんじの悪あしき言ことばは之これを沮ほみたり。二三 何なにとて汝なんじ、心こころに己おのれを高たかし  
 二三 となし、さも大いなる事ことを思おもへるが如ごとく眼めを据すうるや。二三 何なんとて汝なんじ  
 二四 靈天主れいてんしゆに對たいして傲おごり、汝なんじの口くちよりかくの如ごとき言ことばを出いだすや。二四 人ひといかな  
 一五 る者ものなれば、穢けがれなからん、いかでか女おんなより生うまれたる者もの義たゞしと見みえん。  
 一五 視みよ、その聖者せいじやのうちの中にさえ、渝かわらざる者ものはあらず、諸々もろくの天てんもそ  
 一六 の御眼おんめには淨きよからざるなり。一六 況いはんやさながら水みづの如ごとく不義ふぎを飲のみ、<sup>8)</sup>  
 一七 憎にくむべくして無益むえきのなる人ひとにおいておや。一七 我われ汝なんじに示しめさん、我われに聽きけ  
 一八 我われ見たる所ところを汝なんじに語かたらん。一八 智者ちしやは打明うちあけてその父祖ふそを隠かくさず。<sup>10)</sup>  
 一九 この地ちはその父祖ふそにのみ興あえられて、他國よそくにの者ものは彼等かれらの中うちを通とおりし  
 二〇 ことなし。二〇 不敬ふけいなる者ものはその生いくる目ひの限かぎり高たかぶれど、その暴虐ぼうぎやくの  
 二二 年としの數かずは定さだかならず。二二 恐おそろしき音おと、恒つねにその耳みみに聞きえ、安穩あだやかなる時とき

の本四・一八と同  
 じ。一8) 渴ける者  
 が水を慕うように  
 人は不義を喘ぎ求  
 めている。そう思  
 われるほど人は罪  
 を犯しつけている  
 9) ヘブレオ語本  
 「腐敗せる」。  
 10) エリファズは自  
 分の経験や(一七  
 節) まだほかの新  
 しい教に濁らされ  
 ぬ智慧をもつてい  
 た祖先の(一八節)  
 経験を引き合いに  
 出す。

三三 にも彼は絶えず附狙う者なきかを疑う。11) 三三 彼は己が闇より光に立  
 三三 歸り得ることを信ぜず、四方に劍を見る。三三 彼はパンを求めんとて  
 二四 身を動かす時、暗黒の日の己が手近にあるを知る。12) 二四 艱難の彼を  
 二四 恐れしめ、憂悶の彼を圍むこと、戦鬪の用意をなせる王の如くなら  
 二五 ン。二五 蓋は13) 彼手を伸べて天主に抗い、力を揮いて全能なる者に敵  
 二六 いたればなり。二六 彼は頸を起して14) 之に馳せかかり、肥えたる首を  
 二七 武器としたり。二七 肥満は彼の面を覆い、その脇腹には脂肪がかかれ  
 二八 り。15) 二八 彼は荒れ果てたる市におりて、廢墟となりたる16) 人なき家  
 二九 に住めり。二九 彼は富むことあらじ、その財産は永續せずして、彼は  
 三〇 その根を地中に延ばすを得じ。三〇 彼は暗黒より出ずることなく焰そ  
 三一 の枝を枯らさん、しかして彼その御口の氣息によりて吹き去られ  
 三一 ン。17) 三一 彼は空しき迷妄に欺かれ、己が或價もて贖わるるを得べし  
 三三 とは信ぜざらん。三三 彼はその日の満つるに先立ちて亡ぶべく、その

11) 良心は天主に背いた者を少しも落付かせない。—12) 日々の働きにも落付きがな  
 い。暗黒の日とは審判の日。—13) 彼の不幸の理由。—14) 怒つてとびかかる牡牛に象どつた云い方。  
 15) 前述の幸福な状態は、悪人を肥えた獸のよりに驕慢にする  
 16) ソドマなどの如く呪われた。—17) 焼き盡すよるな氣息とは天主の御怒り。

三三 手は萎え果てん。三三 その葡萄果は害そとなるること、漸ようやく花咲きたるばかりの葡萄樹ぶどうのきの如ごとく、またその花はなを振落ふりおとす橄欖オリイヴの樹きの如ごとくならん。18) 三四 蓋そとは善ぜんを装よそおふ者の仲間なかま19) は果みを結むすばず、好このみて賄賂まなを取る者の幕屋まくや20) は火ひの焼やく所ところとなればなり。三五 かかる者は悲愁かなしみを孕はらみ、不義ふぎを生うみ、その胎たいは詐欺いつわりを調とようるのみ。」

### 第十六章

ヨブその友等を諷め、天主の正義に訴う。

二一 一ヨブまた答こたえて云いけるは、三 かかる事ことは我われ屢々しばしば聞きけり、汝等なんじらは皆煩みなわづらわしき慰問者いもんしやなり。三 風かぜの如ごとく空むなしき言ことばにも終おわりなからんや、汝なんじに何なんの煩わづらいありて、かく語かたるや。四 我われも亦また汝等なんじらの如ごとく語かたることを得う。ああ、汝等なんじらの魂たましいわが魂たましいと所ところを更かえん術すべもがな。1) 五 然しからば我われも亦また言ことばもて汝等なんじらを慰なぐさめ、

18) 小アジアのオリイヴの木々の花は北風または東北風に吹き落されて、收穫の見込のなくなる。エリファズはこの二つの譬喩でヨブの子供達が皆夭折することをさしているのである。—19) 一族。—20) へブレオ語本「賄賂の幕屋」。

第十六章1) へブレオ語本の「汝らわが境遇にありせば」の方がわかりやすい。



一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六
を傷つけ、の 容赦なくわが 臓腑を地に注ぎ 出し給いぬ。一五 彼我を撃ち	砕き、我をその 目の敵の如く になし、一四 その槍もて我を 圍み、わが腰	者の許に閉込め、 我を悪しき者 の手に付し給 えり。一三 我、曾てはかく	てわが頬を打ち、 わが苦痛に飽 きたり。一二 天主は我を義 しからざる	き眼もて我を睨 めり。一〇 彼等は我に向 かいてその口を 開き、我を詰り	中し、我を脅か すに我に向か いてその齒を嚙 鳴し給う。わが 敵恐ろし	う者 <sup>4)</sup> わが面 に向かいて起 ち、我を責む。 一〇 彼の <sup>5)</sup> その憤 怒を我に集	去らざるべし。 八 さりながら今 わが苦しみは 我を壓倒し、 わが五體は	くに唇を動かさ んものを。七 されど我何を かなすべき。た とい我語り	汝等に對して頭 を振り、 <sup>2)</sup> 六 わが口もて汝 等を勵まし、 汝等を憐むが 如

2) 嘲弄侮蔑の態度  
 3) 汝は私の家庭を  
 すつかり荒らした  
 4) エリファズその  
 他の友達。一〇) 天  
 主。一〇) エリファ  
 ズ始め、嚴しい非  
 難や怒り憤りを以  
 て、忍苦者ヨブの  
 苦惱を増す無情な  
 人々。一〇) のヘブレ  
 オ語本「わが腎を  
 裂き」。アラビア  
 の諺では、死ぬほ  
 どの重傷を與える  
 意味。

て傷きずに傷きずを加くわえ、巨人おとびとの如ごとく我われに馳はせかかり給たまえり。

一六 我われ粗麻布あらぬのをわが膚はだえぬに縫ぬいつけ、<sup>8)</sup> わが身みに灰はいをかけた

一七 我われが面かほは泣なきしによりて腫はれ、わが目ま蓋ぶたは冥くらみ

一八 ぬ。一八 我われはわが手てに不義ふぎなく、<sup>10)</sup> 天主てんしゆに潔きよき祈禱いのりを献ささげ

一九 たりと雖いえども、かかる憂目うきめを見みたり。一九 地ちよ、わが血ちを蔽おほう

二〇 うなかれ、<sup>11)</sup> またわが叫喚さけびをして汝なんじの上に隠かくるる處ところを得

二〇 しむるなかれ。二〇 視みよ、わが爲ために證あかしし給たまう者ものは天てんにあり

二一 我われをよく知しり給たまう者もの、高處たかきに在います。二一 わが友等ともたちは言多ことばおほし

二二 わが眼め天主てんしゆに向むかいて涙なみだを注そぐ。二二 ああ、人ひとの天主てんしゆに是ぜ

二三 非ひせらるること、人ひとの子このその同輩どうはいに是非ぜひせらるる如ごとく

二三 ならばよからんに。二三 視みよ、東つかの間の年としは過すぎ行ゆく、し

かして我われは歸かえることなき途みちを辿たどりおるなり。」

8) 粗麻布の喪服は肌はだにぢかに着た  
 9) ヘブレオ語本は「わが角つるぎを塵ちりに  
 まるばし汚きたしたり」。角つるぎは榮はえと  
 權勢けんせいとの象徴。—10) ヨブを受難うけがたの  
 聖主せいしゆの前表まへあはと見るならば、大グレ  
 ゴリオごりよに美しい言葉がある。曰く  
 「一つの罪つみをも犯かし給たまうたこと  
 ない主しゆは、御手ごてに汚きたれないのに  
 苦くるしみしみ給たまい、我々われらのため十字架じゆうじや上  
 の責苦せきくまでお受けになつた」と。  
 11) 血ちは天てんに向むかつて復讐ふくしやうを呼よび求  
 める、殊ことごとくに血ちがまだ残のこつていて、  
 見える間まは。カインが流ながしたアベ  
 ルの血ちを思おもい合あわせよ。

# 第十七章

ヨブ天主に希望を置き、死の安息を待つ。

一 わが氣息は糸り、わが目はやがて盡くべし、剩すはただ  
 慕の我を待つのみ。 二 我は罪を犯さざりき、<sup>1)</sup> されどわが  
 眼苦き事の他を見ず。<sup>2)</sup> 三 主よ、我を解放ちて、汝の御傍に  
 置き給え、さらば我を、攻めなば攻めよ、誰の手なりと  
 も。 四 汝彼等の心を了悟より遠ざけ給えり、この故に彼等  
 高きの上ることあらざるべし。 五 彼はその仲間に獲物を約  
 す、されどその子等の眼は潰るるに至らん。<sup>3)</sup> 六 彼は我を民  
 の笑い草の如くになせり、しかして我は彼等の前に見せし  
 め<sup>4)</sup> となれり。 七 わが眼は憤りによりて冥み、わが五體は  
 さながらなきが如くなりぬ。 八 義しき者は之に驚き、<sup>5)</sup>  
 罪なき者は起ちて偽善者を責めん。 九 かくて義しき者はそ

第十七章 1) 即ち、私は汝らが私に負わせているような罪を犯した覚えがない。 2) 友人たちの仕打に對する諷示。 3) 箴言がどれほどまでに眞の智慧を失つてゐるかをあらわす。彼は叡智に満ちたことを云うと約束するが、實際はその云う所は謬りである。 4) 天主の正義の。 5) 天主の御攝理が義人を責め苦しめることに。

一〇 の道を保ち、<sup>6)</sup> 手の淨き者はいよいよ力を加えん。一〇されば汝  
 二 等の中に一人の智者をも見出さざるべし。二わが日は過ぎ去り  
 二 わが思は散りて我を苦しむ。三彼等は夜を晝に變えたり、我闇  
 一三 の後に再光を望む。<sup>7)</sup> 三我たとい待つと雖も、<sup>8)</sup> 黄泉のわが家  
 一四 となるのみ。我暗黒にわが床を展べたり。一四我腐敗に向かいて  
 一五 は、汝はわが父なり」と云い、蛆に向かいては、わが母わが姉  
 一五 妹」と云えり。一五然らば今わが期待は何處にかある。<sup>9)</sup> わが忍  
 一六 耐は誰か之を顧みん。一六わが一切は冥府の深き底に下らん、汝  
 一六 思わずや、彼處にてはせめても我安息を得んと。」

### 第十八章

バルダドまたヨブを責め、悪しき者の惨状を述ぶ。

二 一時にスへ人バルダド、應えて云いけるは、三汝等<sup>1)</sup> 何時まで  
 三 言を鬭わすや。先ず曉れ、然る後我等語らわん。三我等いかで

6) 彼らは依然天主に忠誠を盡し、その徳は堅固になるである。1) 彼らが私に、明るい將來があると欺き思いこませる間は。1) 彼らが約束してくれたように、幸福になるのを待つていても。2) 彼らが約束してくれたような、明るい將來はどこにあるか。

### 第十八章 1) バルダドは

ヨブを、ある種類の人々、



四	畜類の如く思われ、汝等の前に卑しと見らるべけんや。汝怒りて <sup>四</sup> 己が魂を滅ぼす者よ、汝の爲に地の棄てらるることあらんや、岩のその處より移さるることあらんや。 <sup>五</sup> 不敬なる者の光消され、その火焰照らずなることいかでなからんや。 <sup>六</sup> その幕屋にある光は暗くなり、彼の上なる燈火は消さるべし。 <sup>七</sup> その力強き歩度は狭くなり、 <sup>五</sup> その策謀は自分を陥れん。 <sup>八</sup> 即ち彼は網に足を踏み入れて、その編目の中を歩むなり。 <sup>九</sup> 彼の踵は良にかかり、渴 <sup>六</sup> 灼くが如くに彼を苦しむ
---	---

即ち苦しみに逢つても自分を辯護し、自分の罪を軽く見積つたり、全く己に罪なしとしたりして、他人の忠告をばかげた不當な妄語であると云うような人々全體の象りと見ている。バルダドが話の中で「汝等」という複数語を使つていゝのはそのためだといふ人もあるが、他の人達、例えばフィリオンなどは、「汝等」とはヨブとエリファズをさすと云つていゝ。<sup>一</sup>ヨブの「怒り」とは、友人達の言葉や、バルダドが代辯する報復説を拒否すること。<sup>二</sup>悪人だけが苦しむのは、天主のお定めになつた自然の大法である。それをたゞ汝の場合にだけ自然の大法が變更されると思ふのか？<sup>三</sup>幕屋や居間に大きい燈火を点けているのは、小アジアでは幸福のしるしとされていた。それで燈火が消えろとは、急に不幸になる象り。<sup>四</sup>不敬なる者の歩みは、榮えている時には激しい勢だが、やがていゝるいな障碍にあう。<sup>五</sup>の毘にかゝつた者は、穴に落ちた獸のように、飢渴きで力衰える。

一〇 べし。一〇 彼に對して地には足械、小徑には陷穽、隱  
 一 されたり。一 至る所、恐怖彼を怯えしめ、且その  
 二 足に附纏わん。二 その力飢餓に弱れ、衰弱その肋を  
 三 侵せ、三 死の初子<sup>8)</sup> その膚の美しさを蝕み盡し、そ  
 四 の腕を噛み破れ。四 彼の信頼はその幕屋より引き離  
 五 されよ、<sup>9)</sup> 滅亡王の如くに彼を蹂躪れ。一五 彼居らず  
 六 なりて、その仲間彼の幕屋に住えかし、その天幕に  
 七 は硫黄降り注げよかし。一〇 下にてはその根枯れ、  
 八 上にてはその實<sup>11)</sup> 滅び去れかし。一七 彼の思い出、地  
 九 より失せ、その名巷にて讚えらるることなかれか  
 一〇 光より闇に追われ、世より移されん。  
 一九 彼の胤<sup>14)</sup> も血統もなく、その地  
 二〇 方には遺る者一人だになからん。二〇 彼の後に來る

7) 悪人には、全く思いがけぬ處にさえ  
 陷穽が設けてある。一8)「死のういご」  
 を本節の後半にだけかけ、前半を前節  
 に續けて譯す人もある。この詩的表現  
 は癩病を意味する。一9)最後にかくれ  
 が、と頼んだ住居からさえ。一10)罪人の  
 住處に「硫黄が降り注ぐ」とは、曾て  
 のソドマとゴモラでのように、全滅さ  
 せること。一11)ヴルガタ原語 *messis*  
 「收穫」。ヘブレオ原文に基づき、これ  
 を枝と譯す人もある。例えばヘンネや  
 フイリオンの如く。一12)箴二・二二。  
 一小アジアの人々が、不幸の極みと見  
 なしていること。一13)この主語は、天  
 主か人か不明。一14)ヨブの子等の死ん  
 だことに對するあてこすり。一15)彼の  
 住んでいる所。

二一 者は彼の目を見て驚き、彼に先だつ者は恐怖の襲う所とならん。<sup>16)</sup>  
 二二 これぞの義しからぬ者の幕屋、天主を知らざる者の居るべき處なる。

## 第十九章

ヨブその友等の冷酷をかこち、己が受難と將來の復活の信仰とを述ぶ。

一 ヨブまた應えて云いけるは、三 何時まで汝等わが魂を悩まし、言  
 もて我を打拉ぐや。 三 視よ、汝等既に十度も<sup>1)</sup>我を辱しめ、我を虐  
 げて恥じざるなり。 四 寔に我は誤まりしが、わが無知は自分一個に  
 止まるべし。 五 されど汝等起ちて我に抵り、わが侮辱を以て我を責  
 む。 六 せめては今、天主が公平なる審判<sup>2)</sup>によりて我を苦しめ、そ  
 の鞭もて我を圍み給いしに非ざることを曉れ。 七 視よ、我理不盡の  
 苦患を受けつつ叫べども、聽かんとする者なく、呼われども、裁か  
 んとする者なし。 八 彼わが途に垣を繞らし給い我通ることを得ず、<sup>3)</sup>

<sup>16)</sup> 不敬なる者の恐ろしい運命が全世界に知れ渡る。一の一八節にある闇の場所。

第十九章 一)「屢々」という意味をあらわす数。一<sup>2)</sup>自分に相當しているよりもつと厳しく。一<sup>3)</sup>数々の禍から遁れることは全く不可能。



九 彼わが小徑こみちに暗黒くらやみを置き、我われよりわが榮譽さかえを剝はぎ、わが頭こうべより冠かんむりを奪うばい、<sup>4)</sup> 一〇 何處いふちに於おいても我われを打碎うちくだき給たまいしかば、我われせん方盡かたつきたり。かく彼樹かれきを拔ぬく如ごとく、わが希望のぞみを奪うばい去さり給たまいぬ。<sup>5)</sup> 二 二 その御忿怒おんいかり我われに對たいして火ひと燃もえ、彼我かれわれを敵てきの如ごとくになし給たまえり。<sup>6)</sup> 三 三 その諸隊しよたいの同時どうじに攻せめ來きたり、わが許もとに押おし寄よせて、わが幕屋まくやの四周まわりを圍かこめり。三 彼わが兄弟等きょうだいたち<sup>8)</sup>を我われより遠とほざけ給たまい、わが知人等ちじんらは他人たにんの如ごとく我われを離はなれぬ。<sup>一四</sup> わが親戚しんせきは我われを棄すて、我われを知しれる者ものは我われを忘わすれたり、<sup>一五</sup> わが家いえに居おる者もの及およびわが婢等しもめらは、我われを他人たにんの如ごとくになし我われは彼等かれらの眼めに旅人たびびとの如ごとくになれり。<sup>一六</sup> 我われわが僕しもべを呼よびたれど彼答かれこたえざりき、されば我われわが口くちもて之これに請こいぬ。<sup>一七</sup> わが妻つまはわが氣息いき<sup>9)</sup>を厭いとえり、我われまたわが胎たいの子等こら<sup>10)</sup>に願ねがえり。<sup>一八</sup> 愚者おろかものさえ我われを侮あなどり、わが彼等かれらの許もとを去さる時とき、我われを嘲あざけりぬ。<sup>一九</sup> 曾かつてわが相談相手そうたんあいてたりし人ひと々我われを厭いとい、わが最いとも愛あいしたる者もの我われに背そむけり。<sup>二〇</sup> 肉落にくおちたれば、わ

4) ヨブの今の身の上は、廢された帝王の運命のようである。  
 5) 二つの譬喩。前の  
 はこわされた家、あ  
 とのは拔かれた木に  
 たとえてある。  
 6) 本一三・二四。一  
 六・九。一) 攻めよ  
 せる隊とは、先ず第  
 一に友人たちをさす  
 8) 最も近い親戚たち  
 9) 象皮病にかゝると  
 いきがたまらなく臭  
 くなる。一) 自分と  
 同じ母胎を出た兄弟  
 たち。



二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	三二	二一
のなればなり。しかしして汝等、審判あることを知れ。」	<p>「我等彼を苛み、之を責むる云いがかり<sup>16)</sup>を得ん。」と云うや。</p> <p>この故に汝等、劍の前より逃げ失せよ、劍は不義に報復ゆるものなればなり。しかしして汝等、審判あることを知れ。」</p>	<p>の希望蓄えられてわが胸にあり。<sup>15)</sup> 然らば汝等、何とて今、</p> <p>身なり、彼を眺め奉るべきはわが眼なり、他の者に非ず。わがこ</p> <p>わが肉を纏いて、わが天主を見奉らん。<sup>14)</sup> 彼を見奉るべきは我自</p> <p>我最終の日に地より蘇らん、<sup>13)</sup> しかして再びわが皮を着せられ、</p>	<p>て刻みおかんことを。<sup>12)</sup> 實に我は知る、わが贖主は活き給い、</p> <p>そを書に、<sup>11)</sup> また鉛の板に、鐵の筆もて記し、然らずば岩に鑿も</p> <p>くや。<sup>10)</sup> 誰かわが爲にわが言を録さしめん。<sup>9)</sup> 誰かわが爲に</p> <p>れたればなり。<sup>8)</sup> 汝等何とて天主の如く我を窘しめ、わが肉に飽</p> <p>我を憐め、我を憐め、せめては汝等わが友よ、主の御手我に觸</p> <p>が皮、わが骨につき、<sup>7)</sup> わが齒の周圍に残りたるはただ唇のみ。</p>					

11) 極端にやせること。  
 12) 他人の零落を喜ぶのはその人の肉を腹一杯食うようなもの。  
 13) 彼は自分の無辜を公然、永久に證據立てたと思つてゐる。  
 14) 岩に字を刻むことは當時行われていた。彼は聖書に記入されて、その望み以上になえられた。——15) 肉身の蘇りを信ずる何という立派な言葉であるう！  
 16) 原語 *radicem verbi* で文字通り譯せば「言葉の根」。

第二十章

ソファル、悪しき者榮ゆるも短く、忽ちにして倒るることを述べ。

一 ナーマ人ソファル乃ち應えて云いけるは、三 さればこそ<sup>1)</sup> わが種々々の思相継ぎ、わが心彼方此方に馳するなれ。三 汝が我を責めし教は、我之を聽かん、然れどもわが了悟の靈はわが爲に答うるなり。

四 我之を知る、原始より、即ち人の地上に置かれて以來、五 悪しき者の稱えらるるは短かく、善を装う者の喜悅は刹那に過ぎず。六 たといその傲慢天にまで達し、その頭雲に届くとも、七 終には彼糞土の如く亡びて、之を見し人々、八 彼何處にかある。九 と云うに至らん。八 彼は夢の如く飛び去りて見當らず、夜の幻の如く過ぎ去るべし。九 2) 彼を見し眼、最早彼を見ることなく、彼のおりし處また彼を視ることなからん。一〇 その子等は貧に墜れ、三 彼の手<sup>4)</sup> また彼に苦しみを齎さん。五) 彼の骨はその若き日の罪惡に満ち、彼と共に塵

第二十章

1) 汝がそんなにおどかすから  
 2) 夢の中で感じた幸福など、實現もしないし、永續きもしない。――彼の不幸は自分一身に止まらずその子孫にも及ぶ。  
 4) 彼の所行。――5) へブレオ語本は、「彼の手はその奪いしものを返さん。」

二二 の中に眠らん。6) 二三 蓋し悪その口に甘からん時、彼之をその  
 二三 舌の下に隠し、二三 之を惜しみて棄てず、その咽喉に秘めん。  
 二四 彼のパンはその腹に入るや、内にて蝮の胆汁に變らん。  
 二五 彼は呑みたる財寶をも吐き出すべく、天主之をその腹より  
 一六 引き出し給うべし。一六 彼、蝮の頭を吸い、7) 8) の舌彼を殺  
 一七 さん。一七 (彼河の流の) 蜂蜜と牛酪との早瀬を見ることなかれ  
 一八 かし。一八 彼はそのなしたる所を悉く償わざるべからず、  
 然れども滅ぶることはあらず、彼はまたその策謀の多きによ  
 一九 りて苦しむべし。一九 彼は貧民を蹂躪りて之を剝ぎたればな  
 二〇 り。彼は己が建てざりし家を奪い取りたり、二〇 されどその腹  
 はなお飽かざりき。また彼はその欲する物を獲たる時にも、  
 二 之を保有つこと能わじ。三 彼の食物にして残りしものは非  
 三 ず、10) この故にその財物も何一つ永續せざりき。三 彼飽き足

6) 犯罪はいわば人間と共に成長し、墓に入つてからも彼から離れない。1) 蝮の毒は頭部にある。18) ヘブレオ名は「らわばみ」の代りに「エフエー」で、沙漠にいる甚だ美麗だが、人がそれに咬まれるとすぐ死ぬ毒蛇 *Vipra Aegyptiaca* (エジプト蝮) にあたる。  
 9) 水の流は暑い小アジアでは非常に氣持のいいものであるから、この象りは大なる幸福をあらわす。10) ヘブレオ語本では更に明瞭。「彼の貪り食わざりしものは一つもなし。」

二三 彼に襲いかからん。11) 彼の腹満てよかし、さらば天

二四 主彼に向かいて激しき御忿怒を發し、<sup>12)</sup> 之が上に御軍

を雨と注ぎ給わん。13) 彼鐵の武器を遁るとも、青

二五 銅の弓に襲われん。25) 抜かれてその袋を出で<sup>14)</sup> 怨恨に

二六 燦けり。恐ろしき者至りて彼に臨まん。26) 諸々の暗黒

隠されて彼の隠處にあり、人の燃やしたるに非ざる火

彼を焼き亡ぼし、<sup>15)</sup> 其の幕屋に遺りても、彼苦患を受

二七 けん。27) 天は彼の不義を顯し、地は彼に起ち逆わん。16)

二八 彼の家の苗裔は危険に曝され、天主の御忿怒の日に

二九 衰うべし。29) 是こそ悪しき人が天主より授かる分前、

是こそ主より受くるその業の相續分なれ。」

11) 彼が虐げ不幸にした人々はみな、その時恐れず彼に攻めかかるである。—12) 彼に虐げられた人々のみか天主御自身も起つて彼を責め給うである。—13) 雨も水の流れ同様幸福を意味する。しかし天主は悪人にはみのりをもたらず慈雨を與えず、御軍を雨と注ぎ給うである。14) 二四節後半にある弓に象どつてある。—15) 天主御自身が彼に下し給うべき火。—16) 本一六・一八以下で、ヨブが自分の無罪を證するため天を呼んだので、ソファアルはそれが寧ろ大罪人たる彼の罪を證するといるのである。



## 第二十一章

ヨブ、この世にては悪人も屢々終生榮ゆることあれど、  
後の世にては必ず審判せらるべきを説く。

九	八	七	六	五	四	三	二
群 <small>むれ</small> もその目 <small>め</small> の前 <small>まえ</small> に、久 <small>ひさ</small> しく存 <small>ぞん</small> ず。 <small>九</small> 彼等 <small>かれら</small> の家 <small>いえ</small> は憂 <small>うれ</small>	故 <small>ゆえ</small> ぞ。 <small>五</small> 八 彼等 <small>かれら</small> の胤等 <small>こら</small> はその前 <small>まえ</small> に、親戚 <small>しんせき</small> と孫等 <small>まごら</small> との	恐怖 <small>おそれ</small> を催 <small>もよお</small> し、わが身 <small>み</small> 顛 <small>ふる</small> え戦 <small>たた</small> く。 <small>七</small> 然 <small>しか</small> らば悪 <small>あ</small> しき者 <small>もの</small>	き、汝等 <small>なんじら</small> の口 <small>くち</small> に指 <small>ゆび</small> を當 <small>あ</small> てよ。 <small>四</small> 我 <small>われ</small> 思 <small>おも</small> い回 <small>めぐ</small> らす度 <small>たび</small> に	悲 <small>かな</small> しむも道理 <small>ことわり</small> ならずや。 <small>三</small> 五 汝等 <small>なんじら</small> 我 <small>われ</small> に耳 <small>みみ</small> を傾 <small>かたむ</small> けて驚 <small>おどろ</small>	かし。 <small>二</small> 四 抑々 <small>そも</small> わが論 <small>ろん</small> ずる相手 <small>あいて</small> は人 <small>ひと</small> ならんや、わが	言 <small>ことば</small> を聽 <small>き</small> きて、痛悔 <small>つうかい</small> せよ。 <small>一</small> 三 我 <small>われ</small> を容 <small>ゆる</small> せ、さらば我語 <small>われかた</small>	一 一ヨブまた應 <small>こた</small> えて云 <small>い</small> いけるは、三 請 <small>こ</small> う、汝等 <small>なんじら</small> わが

第二十一章 1)ヘブレオ語本「これを以て汝らの慰藉に代えよ」。すなわち「汝らが黙つて落付いて聽いてくれるのは、變な慰め方をしてくれるよりも私にとつて有難い」という意。一六・二参照。

2)まあ私のいうことを落付いて聽け。私の言がばからしく思われたら、あとで笑つていい。1)彼が天主の正義を疑わなければならぬと思つて、ことを考える、悲しくなる。1)沈黙の身ぶり。

5)耶一二・一。哈一・一三。1)幸福の第一の理由―彼らは子孫が澤山あつて、長生きをしている。

一〇 なくして安泰なり。天主の鞭彼等に臨まず。<sup>7)</sup> 一〇その牛は  
 孕みて流産することなく、その牝牛は仔を生みて、胎兒を  
 失うことなし。<sup>8)</sup> 二 彼等の小さき者等はさながら群の如く  
 外に出で、彼等の子等は踊り戯る。三 彼等は鼓や小琴を執  
 り、笛の音を聞きて樂しむ。<sup>9)</sup> 一三その日その日を幸福に過  
 せど、瞬く間に黄泉に下る。<sup>10)</sup> 一四 彼等は天主に云えり、<sup>11)</sup> 我  
 等より遠ざかり給え、我等は汝の道を知ること欲まず、  
 一五 全能者抑何者なれば、我等之に事うべきぞ。我等彼に祈  
 るとも、何の益か是あらん。<sup>11)</sup> 一六 然れども彼等の幸  
 福はその手にあるに非ざれば、<sup>12)</sup> 悪しき者の策謀は我より  
 遠ざかれかし。一七 抑幾度悪しき者の燈火消され、洪水之  
 を襲い、天主怒りて之に苦患を分ち與え給うならん。<sup>13)</sup>  
 一八 彼等は風の前の糠殻の如く、旋風の吹き散らす灰の如く

7) 第二の理由—彼らの財産は安  
 全である。—8) 第三の理由—彼  
 らの財産はふえるばかり。  
 9) 第四の理由—豊かな生活。  
 10) ヨブの望み(六・九及び一〇  
 ・一八以下参照)は、長く苦し  
 まずに早く死にたいというので  
 あるが、これもやはり不信仰な  
 者共の望む所である。—11) 馬三  
 ・一四。—12) 彼らの安樂は自分  
 の力によるのでなくて天主のお  
 かげである。—13) これは疑問文  
 で、かような事實は極く少いと  
 いう意味。

一九 ならん。<sup>14)</sup> 一九 天主は父に興うる苦しみを取置きて、その子等に興え給う。しかして彼<sup>15)</sup>の報い給わん時、彼<sup>16)</sup>思い知るに至らん。<sup>16)</sup> 二〇 彼の眼は己が滅亡を見るべく  
 二一 彼は全能者の御忿怒を飲むべし。<sup>17)</sup> 二二 夫れ、彼亡き後には、その家のことも、また彼の月の數半減せられたりとも、彼にとりて何の關係あらんや。 二三 誰か高き者<sup>18)</sup>をも審判き給う天主に、知識を教うる者あらんや。  
 二四 この人は強く健かに、富み且幸福にして死す。 二五 その腹は脂肪に満ち、その骨は髓に潤えり。 二六 またかの人<sup>19)</sup>は、心を苦しめ、全く富むことなくして死す。 二七 然れども彼等は等しく塵の中に眠り、蛆之を覆わん。  
 二八 我は明確に汝等の思と、我に對する謬見とを知る。  
 二九 夫れ、汝等は云う、〃王侯の家は何處にかある、悪

14) これらの語は、やはり前の「幾度」にかかる。すなわち稀でめずらしいという意味。 — 15) 天主。 — 16) ヨブはここで、友人達が子らもその兩親の悪ゆえに、天主から常に罰せられると主張するに對して答える。本節の前半は反駁。本節の後半及び次節は「しかし死後はもはや子孫に對するそういう罰も、わが身に受けるのではないから、生前に自分で罰を受ける方が一層正義に適う」という意味。  
 17) ヘブレオ語本によれば願望の文で「彼の目の……見えんことを」。  
 18) ヨブは友人達から幾度もかかる激しい非難の言葉を聞かされたが（四・一八。一五・一五参照）、今度は相手にそれを投げ返す。天主の裁き給う「高き者」とは天使のこと。

二九 しき者の幕屋は何處にかある。〃と。二九 道ゆく者の一人に  
 三〇 問え、さらば汝等、彼も亦この事を知れるを了らん。三〇 そ  
 は即ち悪人は滅亡の日まで残り置かれ、怒の日<sup>19)</sup>まで携え  
 三一 行かるべきことなり。三二 誰か彼に向かいてその道を示さん  
 三三 や、誰か彼にその爲したる所を報いんや。三三 彼は墓に搬  
 三三 ばれ、死人の塚の中にて見張をなさん。三三 彼はコキトウ  
 三四 ス<sup>21)</sup>の砂礫にも喜ばれ、すべての人を己が後に引き行か  
 ん、彼の前に行きし者も數知れず。三四 然らば汝等何とて徒  
 らに我を慰めんとはする、汝等の答の眞理に背けることは  
 明らかなるものを。」

### 第二十二章

エリファズ、ヨブに多くの罪を着せ、もし痛悔せば必ず榮ゆるに至らんと云う。

一時にデマン人エリファズ、應えて云いけるは、「一人、たとひ全き知識ありとも、豈天

19) 最後の賞罰の行われる日。  
 20) 彼のために記念碑が建てられるから。—21) これはこの世とあの世、地上の世界と地下の世界との境界をなしている死者の國の河。このコキトウス河畔には常に悲しみと嘆きとがあるが、悪人には屢々その境界の所まで幸福が続いているように見える  
 コキトウスはヘブレオ語 Nahal (谷) の譯語。



三 主に較ぶるを得んや。1) 汝義しくとも、天主に何の益かあらん、また汝の道2) に汚れなくとも、彼に何をか加えん。  
 四 彼恐れゆえに汝を責め、汝に對して審判を行い給わんや。  
 五 そは汝の數々の悪事の爲汝の涯なき不義の爲に非ずや。  
 六 夫れ、汝は故なく汝の兄弟より質草を取り、裸なる者3)の衣服を剥ぎ、憊れたる者に水を與えず、飢えたる者にパンを拒み、八 汝の腕の強きによりて土地を得、最も勢力あるによりて之を保てり。九 汝は寡婦を空しきまゝに追ひ返し、孤兒等の腕を折れり。10 この故に汝は良りに圍まれ、恐怖俄に汝を怖じ惑わしめん。11 汝、暗黒を見じと思ひしか、汨濫する水の勢にも壓倒せられじと思ひしか。  
 12 汝思わずや、天主の天よりも高く、星辰の頂をもぬきんでて在すを。13 汝は云う、  
 天主何をか知り給わん。彼の

第二十二章 1) 彼は「不幸は常に天主のお罰である」という自分達の主張を受け入れないヨブをさして、天主に己をくらべる者という。12) おこない、行狀。3) 裸も同然の貧しい者。14) エリファズは、無情(六節)、冷遇(七節)、暴虐(八節)、寡婦や孤兒のものを奪い取ること(九節)など、貪慾な人々によく見られるあやまちを挙げる。エリファズのかかる主張がいかに謬つてゐるかは、三一・一七からわかる。15) 禍。

一四 審判き給うは、さながら霞を隔ててする如し。6) 雲は彼の蔽布なれば、  
 彼は我等の事を憐し給わず、天の極を歩み巡り給う。7) 汝は悪し  
 一五 ひとり々の履みたる代々の小径を守らんと欲するや。8) 彼等は己が時の來  
 一六 き人々の履みたる代々の小径を守らんと欲するや。8) 彼等は己が時の來  
 一七 らざる前に取除かれ、大河その基礎を覆せり。一七 彼等は天主に向かいて、  
 一八 // 我等を離れ給え。// と云い、全能者を何事もなし得ざるものの如くに見  
 一八 傲しぬ。一八 然るに彼は彼等の家に善き物を満し給えり。彼等の考うる所、  
 一九 我に關りなけれ。一九 義しき者は見て喜ばん、罪なき者は彼等を嘲らん、  
 二〇 二〇 曰く、// 彼等の思いあがりは挫かれたるに非ずや、彼等の遺ししものは  
 二一 火焼き盡したるに非ずや。// と。二一 されば彼に服いて平安を得よ。汝之に  
 二二 よりて最良の結果を得ん。9) 彼の御口より律法を受け、その御言を汝の  
 二三 心に藏めよ。二三 汝もし全能なる者の御許に立歸らば、再び起上りて、汝の  
 二四 幕屋より不義を遠ざくるを得ん。二四 彼は土の代りに礫を、10) 礫の代りに金  
 二五 を、瀧津瀬の如く與え給わん。二五 しかして全能なる者汝の敵に抵り、白銀

6) 事情をよく  
 知らないから  
 7) 人間のこと  
 などにはかま  
 わず。—8) か  
 くる悪しき人  
 はノエの大洪  
 水(一六節參  
 照)時代その  
 他の人間であ  
 る。—9) 改心  
 せよという勸  
 告。—10) 彼の  
 家がシツカリ  
 と立つている  
 堅い岩。

二六 汝の爲に山と積まれん。二六 然らば汝全能者によりて歡喜に溢れ、  
 二七 天主に向かいて汝の面を擧ぐるに至るべし。二七 汝彼に願わんに、  
 二八 彼汝に聽き給わん、しかして汝己が誓をはたすを得ん。11) 二八 汝事  
 二九 を思い立たんにその事成就せん、汝の道には光輝かん。二九 蓋し遜  
 三〇 りたる者は榮譽に至るべく、眼を伏する者は救わるべし。12) 三〇 罪  
 なき者は救わるべく、そはその手の潔きによりて救わるべし。13)

第二十三章

ヨブ天主の審判を受けんことを望む。

二一 一ヨブまた應えて云いけるは、三「今もなおわが言は苦惱に満ち1)  
 二 我を打懲らす手はわが嘆息より2) 重し。三 我をして主を知り且見  
 三 出し、以てその玉座に至るを得しめん者は誰ぞ。四 我その御前に  
 四 訴訟を出し、わが口に満てる主張をなさん、五 これ、我が彼の我  
 五 に答え給う御言を知り、その我に云い給う所を曉るを得んためな

11) 願いをかなえられる  
 だるう。—12) 箴二九・  
 二三。—13) 自分の意志  
 でいかなる不義もして  
 いないなら。

第二十三章 1) 汝が詰  
 責したので、私は語り  
 ながらも、悲しみが胸  
 に一ばいだ。—2) わが  
 嘆息であらわすことが  
 できないくらいに。  
 3) 本一〇・二。一三・



六　　り。我は彼が大いなる力もて、我と争い給い、その偉大に在す重さも  
七　　て、我を押し拉ぎ給うことを欲せず。願わくは彼、我に對して公平を  
八　　示し給い、わが訴訟勝利に至らんことを。我、東に行くも彼見え給わ  
九　　ず、西に行くも彼を認め奉らず、左に行くも、如何にせん、彼を捉え  
一〇　奉らず、右に向くも、彼を見奉らず。されど彼はわが道を知り、火を  
一一　経る金の如くにして我を試み給う。二 わが足は彼の御足跡を辿れり、  
一二　我は彼の道を守りて、之を離れざりき。三 我は彼の御唇の御誠命に違  
一三　わず、彼の御口の御言をわが胸に秘めたり。蓋し彼は獨り存する。御  
一四　者に在せば、誰もその思い給う所を變うる能わず、彼はその御心に欲し  
一五　給う事を、すべて爲し給えり。彼は我に對して御旨を成就げ給いしも  
一六　なお他にかくの如き事数多、御許にあるべし。この故に我はその御面  
一七　前にて狼狽え、彼を仰ぎ奉る時、恐怖に顛い戦く。天主わが心を臆せ  
しめ、全能なる者我を怖じ惑わしめ給えり。實に我迫り來る暗黒の爲

三。一六・二二の如く、また天主に訴える。  
四) 哥前三・一五参照。一) あらゆるものがたゞその御攝理と御力とに左右され従つてそれ以上高い主にして審判者たる者があり得ないという意味において、天主は唯一獨存の御者。



に滅びざりき、霞またわが面を覆わざりき。」<sup>6)</sup>

### 第二十四章

天主御辨理によりて悪人の長く罪の道行くを措き、後の世にて之を罰し給う。

<sup>6)</sup>ヘブレオ語本「我を滅ぼすは、不幸にもあらず、またわが面を覆う闇にもあらず。」それは彼にまだ説明のできない天主の不思議ななされ方のせいである。

第二十四章 1) 報いの日。彼らは主がいつ如何にして報い給うかを知らない。

一	「全能なる者には時も隠れなし、されど彼を知る者その日を知らず。1) 2) 或者は境界標を推進め、畜群を奪いて之を飼い、3) 孤兒等の驢馬を逐い拂い、寡婦の牛を質草に取上げ4) 貧しき者の道を掘崩し、世の柔和なる者を皆齊しく虐げたり。5) また或者は荒野に在
二	
三	
四	
五	

一五 一五 姦淫する者の眼は宵闇を窺い、  
 一四 一四 人を殺す者夜明に起き  
 一三 一三 主は報いずして見過し給うに非ずや。  
 一二 一二 彼等は光明に叛き、主の道  
 一一 一一 彼等は人々を  
 一〇 一〇 彼等は裸なる者、  
 九八 九八 かの者共は暴力もて  
 七 七 之を裸と  
 六 六 彼等は己が有にあらざる畑を刈り、  
 五 五 乏しき者、貧しき者を殺す、  
 四 四 人を殺す者夜明に起き  
 三 三 主は報いずして見過し給うに非ずや。  
 二 二 彼等は光明に叛き、主の道  
 一 一 彼等は裸なる者、  
 九八 九八 かの者共は暴力もて  
 七 七 之を裸と  
 六 六 彼等は己が有にあらざる畑を刈り、  
 五 五 乏しき者、貧しき者を殺す、  
 四 四 人を殺す者夜明に起き  
 三 三 主は報いずして見過し給うに非ずや。  
 二 二 彼等は光明に叛き、主の道  
 一 一 彼等は裸なる者、

2) 彼らは酒搾を踏むつらい労働をしたにもかかわらずその報いとして葡萄酒を呑むこともさせて貰えぬ。  
 3) 友人に問いかける言葉。天主は悪人から悪をなす力を奪い取り給わず彼がもつとその力に應じてよく、主が終には悪から善を引き出し給うことを考えるように仕向け給う。

一六 その面を覆わん。<sup>4)</sup> 一六 彼は彼等が晝に光を厭いつつ互に定めたる如く、暗きに至りて家々を破る。

一七 一七 東雲俄に現れんに、そは彼等にとりて死の蔭に見ゆ。彼等の暗黒の中を歩むこと、さながら光明の中を歩むが如し。<sup>5)</sup> 一八 彼は軽くして水の面に浮く。<sup>6)</sup> この世にてその分は呪われよかし。また彼葡萄畑の途を歩むことなかれ。一九 彼、雪水より厳しき暑さに移れかし、その罪は冥府にまで至れかし。<sup>7)</sup> 二〇 憐憫<sup>8)</sup> 彼を忘れ去り、蛆<sup>9)</sup> その快樂となれかし。願わくは彼が記憶に止まることなく、果を結ばざる樹の如くに打碎かれんことを。二二 蓋は彼、子を有つことなき石婦<sup>10)</sup> を食い潰し、寡婦に善き事をなさざりしが故なり。二三 彼はその力もて

4) 悟られないように覆面する。—5) 暴虐なる者は公けに罪悪を行い、他の殺人者盗人、姦淫者などはひそかに悪事をなすとげる。—6) 聖トマは之を「悪人は自分の邪慾を遂げようと、容易に掟や罰の警告などを無視してしまふ。」と説明している。フィリオンは「最も簡単な説明はこの言葉をヨブが友人の言を皮肉に引用したものと解することである。」と云う。そうすれば本節の後半は答えとなる。

7) 一種の呪いの形式。極寒から極暑に移るとは、罰の恐るべきことをあらわす。

8) ヘブレオ語本では、最後の依り所たる「母さえも」。—9) 彼は蛆の餌食となれ。

10) 子供らに扶養されることのない哀れな者。「食い潰す」と譯したヴルガタ原語 Pavit は depavit の義。

強き者を引き倒せり。されど彼起ち上りし時にも、己が生命を恃む能わず。三 天主は彼に痛悔の暇を賜いしが、彼は傲慢にも之を悪用す。されど天主の御眼は彼の道を彎すなり。11) 二四 彼等は少時の間高きに上げらる、然れども永續せずして、一切の如くに倒れ、取り除かれ穂先の如くに揉み潰されん。12) 二五 もし然らずば、誰か我にわが偽りしことを認めしめて、天主の御前にわが言を訴うるを得ん。」

11) 黙二・二一。  
12) ヘブレオ語は「切る」。これは東方の若干の國で行われてゐる、刈入の時に穂先を切つて下の莖は残しておく、やり方を暗示している。

### 第二十五章

バルダド天主の正義を説き、その御前には何人も義しと云い得ざることとを述ぶ。

一 是に於いてスへ人バルダド應えて云いけるは、二 權能あり、畏るべきは彼にて在す、彼はその高き處にて、和睦せしめ給う。1) 三 その軍勢、豈数うることを得んや。またその光誰の上にか昇らざらん。2) 四 人天主と較べて、義しとせらるるを得んや。また女より生れし者、潔しと見らるるを得んや。五 視よ、その御眼には月も輝かず、星も

第二十五章 1) 善天使悪天使間に行われた昔の戦いを暗示す 黙一二・七と比較せよ。 — 2) 天主はあらゆる人の非を御存じ



六  
清きよからず。<sup>3)</sup>六むまして朽くつるもの  
なる人ひと、蛆虫むしむしなる人ひとの子こは如何いか  
にぞや。」

## 第二十六章

ヨブ天主の御叡智と御力とに就き所感を述ぶ。

であるから、汝を軽く裁き給うことなどお出来にならぬ。  
3) 我々の知つている最も清らかなものですら、天主の御前に  
不淨であるとすれば、まして朽つるもの、蛆虫のような人間  
はどうであるう。

一 ヨブ乃すなわち應こたえて云いいけるは、  
二 汝なんじは誰たれを助たすくる者ものぞ、弱よわき者もの  
に非あらずや。汝なんじは力ちからなき者ものの腕うでを  
支さうや。1) 三 汝なんじ誰たれにか策さくを授さけた  
る。智ち慧えなき者ものに對たいしてならん。  
かくて汝なんじ大おほいなる賢けん慮りよの程ほどを示しめ  
したり。四 汝なんじ誰たれにか教おしえんとし  
たる。氣い息きを創つく造くり給たまいし者ものに

第二十六章 1) わざと皮肉に感嘆して云う。全能全知の天主  
にはバルダドの辯護など必要がない。

五 對してに非ずや。五 視よ、巨人等<sup>2)</sup> 水の下にて<sup>3)</sup> 呻  
 六 き、之と共に棲む者また然り。六 黄泉も彼の御前に  
 七 は露なり、滅亡<sup>4)</sup> を蔽うものなし。七 彼は北を虚し  
 八 き處に張り、地を何物もなき處に掛け<sup>5)</sup> 八 水を綴り  
 九 合せて雲となし、破れて共に落つることなからしめ  
 一〇 九 その玉座の面を覆いて<sup>6)</sup> 之が上に雲を展べ給う。  
 一〇 彼は光と闇と終るまで、<sup>7)</sup> 水に限界を設け給えり。  
 一一 二 彼命じ給えば、天の柱<sup>8)</sup> 震い戦く、<sup>三</sup> その御權能  
 一二 には、海も忽ちに凝り、その御智慧は傲る者を撃て  
 一三 一〇) 一三 その御靈は天を飾り、その産みなす御手は、  
 一四 曲りくねる蛇<sup>10)</sup> を出せり。一四 視よ、是等はただその  
 御業の一端に就きて述べたるのみ。しかも我等殆ど  
 その御言の小さき滴を聞きしにも足らざるを思わば

2) 聖書では巨人の一民族をあらわすのに屢々ラファイムという名詞が用いられている。3) 他界した者の留まる處。セオール(よみ)があるとされていた地の底。4) ヘブレオ語アバツドーン。セオル、すなわちよみの別名。5) 地球は何も支える物のない空間に浮かんでいる。6) この云い方は、天主の住まい給う天の上部をあらわす。7) 即ち夜晝の交互に来ることがやんで、光だけが残る時まで。故に時というものが終るまで。8) 天の穹窿がのつてい

るように見える高い山々。9) 海は荒立つて手に負えないように見えるが、天主は御意の儘に之を静め給う。

10) 大熊小熊兩星座の間に龍座がうねつている。

誰か主の偉大さの轟音に堪うるを得んや。」

## 第二十七章

ヨブ己の罪なきこと、及び偽善者の終に罰せらるべきことを主張す。

一ヨブまたなおも、その話を續けて、云いけるは、  
二我に審判を拒み給える天主、  
三我が魂を苦惱に至らしめ給える全能者は活き給う、  
四我に氣息あり、天主の御息吹<sup>1)</sup>のわが鼻孔にある間、  
五我が唇不義を語らず、  
六我が舌虚欺を構えざるべし。  
七我は決して汝等を義しと思わず、  
八我が死するまでわが罪なきことに就きては一步も退かじ。  
九我、己が義しきことを云い出でしが、  
十飽くまで之を棄てじ、  
十一蓋はわが生れしより以來、  
十二わが心の我を責めしこと曾てなければなり。  
十三わが敵は悪しき者、  
十四わが反對者は義しからざる者とせられよかし。  
十五蓋し善を装う者、  
十六もし貪り奪い、  
十七天主その魂を救い給わずとせば、  
十八彼に何の希望あらんや。  
十九困窮彼に臨む時にも、  
二十天主豈その叫喚を聞き容れ給わんや。  
二十一また彼全能者を喜悅となし、  
二十二いかなる時にも天主を呼び頼むを得んや。  
二十三我、天主

第二十

七章

1) 創二

七。

の御手みてによりて、全能者ぜんのうしやの有し給う所ところを汝等なんじらに教えん、<sup>2)</sup> 隠すことを  
 せじ。二三 視よ、汝等なんじらも皆之みなこれのを知る、然るに汝等なんじら故なく空しき事を語  
 るは何ぞや。二三 悪しき人ひとの天主てんしゆより賜たまわる分前わけまえ、暴虐ぼうぎやくなる者ものの全能者ぜんのうしや  
 より受くる相續そらぞく分は次の如し。二四 その子等こらふ殖えなば、刃やいばにかかるべく  
 その孫等まごらはパンに飽くことなかるべし。二五 その遺れる者ものも滅びて葬ほうむら  
 るべく、その寡婦等やもめらは嘆かざるべし。二六 彼もし土つちの如くに銀を集め、  
 粘土ねんどの如くに衣服を備えば、二七 実に備うるを得べきも、義たゞしき者之を  
 着、罪なき者その銀を分つに至らん。<sup>4)</sup> 二八 彼は蛾の如くに家を建て、  
 番人ばんにんの如くに小屋を造りたり。一九 富める者も眠る時には何物をも携え  
 行くを得じ、その眼を開き見るに何物もなからん。<sup>5)</sup> 二〇 貧窮水ひんきゆうみずの如く  
 に彼を襲い、夜には暴風彼を虐げん。三一 灼くが如き風、彼を吹き上げ  
 て持ち去り、旋風の如く、彼をそのおる處より奪い行かん。三二 彼かれ之これ  
 を撃ちて容赦し給わざらん、彼その御手みてより逃れ亡せん。三三 人ひと之かれに

2) 今度はヨブが一層明らか意識して、天主の御攝理について教え、以下の言葉を語り出す。— 3) 私の境遇が犯罪者のそれでないことを。  
 4) ヨブがこゝで云っている、悪人の努力の結果が義人の利益になることは屢々あるが、一般の法則ではない  
 5) 詩四八・一八。  
 6) 天主。— 7) 天主の御報復を目撃する人々。



向かいて手を拍ち、そのおる處を見て、彼を嘲らん。」

## 第二十八章

人勉めて已まざれば多くの事を究め得、されど眞の智慧は獨り  
天主のみの授け給う所。

一 銀には鑛脈の源泉あり、金には熔融す處あり。二 鐵は土より取り、鑛石は熱して溶かせば、青銅に變ず。三 人は暗黒に期限を定め、<sup>2)</sup> すべての物の終を考う、暗黒と死の蔭との中にある鑛石に就きても亦然り。四 溪流は旅行く人々より、乏しき人の足が忘れたる者と、道なき所をさまよう者<sup>1)</sup>とを隔つ。五 パンのその處に生ずる地は、火によりて覆されたり。六 その石は青玉<sup>5)</sup>のある處にして、その土塊は金なり。七 この小徑は鳥も之

### 第二十八章

1) とういうことが述べてあるのは、聖書中たゞこゝだけである。シナイ半島やリバノンには鑛脈があつた。  
2) 人間は地中に埋藏されている金屬を發掘する。1) 3) 地下で働く坑夫。1) 4) パンの生ずる地とは耕作地。昔の鑛石採掘の方法は、まず盛んな火で岩石に龜裂を生ぜしめ(脆くして)、それからその熱した岩石に始めて鶴嘴やハンマーを使用した。1) 5) 青玉即ちサファイアは青空色の寶石で、大司祭の胸牌にも嵌めてあつた。

八 を知らず、禿鷹の眼も之を見しことあらず、商人の  
 子等も之を踏みしことなく、獅子も之を通りしことな  
 一〇九 し。人その手を岩に伸ばし、山を根より崩し、岩  
 二 に川<sup>6)</sup>を掘り、その眼に諸種の貴き物を見、二また河  
 の底をも探りて、隠れたる物を明るみに出せり。<sup>7)</sup>  
 二三 然れども智慧<sup>8)</sup>は何處にかあらん、了解<sup>9)</sup>のある處  
 一三 は何處ならん。一人はその價値を知らず、またそれは  
 一四 安樂に暮らす人々の地に見出すを得ず。<sup>10)</sup> 淵はわ  
 が中<sup>11)</sup>にあらずと云い、海はわが許<sup>12)</sup>にあらずと云  
 一五 う。純金も之を買<sup>13)</sup>う能わず、銀も秤量りて之に換  
 一六 る能わず。<sup>11)</sup> インドの染料も、極めて貴き石なる紅  
 一七 縞瑪瑙<sup>12)</sup>又は青玉も之に比較<sup>13)</sup>おべからず、黄金も玻  
 一八 璃も之に及ばず、金の器も之に換<sup>13)</sup>うる能わず。高

6)「川」とは前後の關係から見れば、  
 抗道そのものか、又は地下水を坑道  
 から排除するための排水溝である。  
 7)人間は埋藏されている目に見えな  
 い寶を地中からさえ取り出す高度の  
 知識を有している。—8)聖書に掛け  
 る智慧とは、個々の事物一切を創造  
 者主宰者たる天主に還元してする認  
 識である。—9)さとりと智慧の一  
 部で、我々がそれによつてあらゆる  
 欺瞞に陥らぬよう裏の裏まで見ぬく  
 もの。—10)努力せずには得られない。  
 11)智七・九。—12)紅縞瑪瑙は瑪瑙の  
 一種で、稍橙色を帯びた褐色をもつ。  
 ある人々は綠玉又は綠玉石(明るい  
 綠色の寶石)と解釋している。  
 13)玻璃すなわちガラスは大昔黄金同  
 様珍重された。

一九 くして優れたたる物<sup>14)</sup>も、之に比較べては云うに足らず、さて智  
 慧は知れざる處より引出さる。一九エチオピアの黄玉も之に及ば  
 ず、最も純き染料も之に比較ぶる能わず。二〇然らば智慧は何處  
 より來るや、了悟のある處は何處なりや。15) 三そは生きとし生  
 ける物の眼に隠れ、空の鳥にも秘められたり。三滅亡<sup>16)</sup>も死も  
 云えり、〃我等耳にその噂を聞けり。〃と。17) 三三天主はその道  
 を辨え給う、彼はそのある處を知り給う。三四蓋は彼地の果まで  
 も見渡し、天が下なる物を悉く變し給えばなり。三五彼は風に  
 重量<sup>18)</sup>を與え、水を量に循いて秤り給えり。二六彼雨の爲に法を  
 設け、轟もす暴風の爲に道を定め給いし時、二七それ<sup>19)</sup>を見、之  
 を語り、備え、究め給えり。二八しかして人に曰いけるは、〃視  
 よ、主を畏ること、20) 是ぞ智慧なる、また惡より離るることそ  
 了悟なれ。〃と。〃

14) ヘブレオ語本「珊瑚と水晶」。珊瑚は裝飾品として知られ、わけても紅海から採取された。  
 15) かく長々と列舉した後で、再び十二節の質問に歸る。—18) ヘブレオ語本では「アバツドーン」死者の居る所、「よみ」。  
 17) 何人も智慧を有つていない。皆智慧のことを聞くだけ。—18) 風の壓力。  
 19) 智慧。—20) 詩一一〇・一〇参照。天主を畏れることと、その御旨を守ること。

### 第二十九章

ヨブ前に幸福なりしこと、及び萬人に尊ばれしことを述ぶ。

一ヨブまた累ねてその話を始めたり、即ち曰く、二誰か我をして過ぎにし月の如く、<sup>1)</sup> 天主の我を護り給いし日の如くに、ならしむるを得ん者もがな。<sup>三</sup> かの時には彼の燈火わが頭を照らし、我その光によりて暗闇を歩めり。<sup>四</sup> 天主親しくわが幕屋に在せるわが若かりし日には然りき、<sup>五</sup> かの時には全能なる者我と共に在し、わが子等わが周圍にありき。<sup>六</sup> かの時には我牛酪もてわが足を洗い、<sup>二)</sup> 岩わが爲に油の川を流し出せり。<sup>三)</sup> かの時には我進みて市の門<sup>四)</sup> に至れば、人々廣場にてわが爲に座を設えたり。<sup>八</sup> 若きは我を見て隠れ、老いたるは身を起して立ち、<sup>九</sup> 諸侯は語るをやめて、その口に指を當て、<sup>五)</sup> 一〇長等は聲を呑みてその舌

第二十九章 一ヨブはもとの幸福な境遇を天主のおかげとして再びそらなりたい憧憬望む。

二) 驚嘆すべきほど物資に豊かであつたことを力強く表現する象

り。一三) 申三二・一三、一四参照。一四) 市の門の所では会議や裁判が開かれた。一五) 昔のペル

シヤの彫刻には、王に侍しながら手を口に當てているいるいな人物が表わしてある。これは

口の息が王に當らぬようにする爲。



二 咽喉に付きたり。二 わが言を聞きし耳は我を祝し、我を見し眼は  
 一 二 わが爲に證を爲せり、三 そは我、叫ぶ貧者、助くる者なき孤兒を  
 一三 救いたればなり。一三 亡びんとする者の祝福我に下り、我寡婦の心  
 一四 を慰めぬ。一四 我正義を着、衣冠の如くわが権を身につけたり。  
 一五 我は盲人には眼、跛者には足となり、一六 貧しき者には父となり  
 一七 わが知らざる訴訟を入念に調べ、一七 悪しき者の顎を砕き、その  
 一八 齒より獲物を取り去れり。一八 しかして我云えらく、〃我はわが巢  
 一九 の中にて、死すべく、棕櫚の如くに多くの目を累ぬべし。一九 わ  
 二〇 が根は水の邊に擴がり、わが作物には露の絶ゆることなからん。  
 二一 〃わが榮は常に新なるべく、わが弓はわが手にありて力を恢復す  
 二二 べし。〃と。三二 わが言を聞きし人々、わが判定を待ち、黙してわ  
 二三 が意見に耳を傾け、三三 わが言には敢て一語をだに加えず、わが語  
 三三 する所は彼等を露せり。三三 彼等は雨を待つ如くに我を待ち、晩き<sup>9)</sup>

6) この象りは、野獸の  
 牙を折り砕いて、人を  
 害することができぬよ  
 うにした昔の習慣から  
 採つたもの。一) 若干  
 の解釋者はタルムード  
 のように「不死鳥の如  
 く」と譯している。こ  
 の鳥については、五百  
 年毎に己を巢もるとも  
 焼き、また五百年を經  
 て後その灰の中から、  
 若返つて蘇ると云われ  
 ている。一) 棕櫚は徐  
 々に成長するが、長い  
 間青々としていて勢が  
 よい。一) ニサンの月  
 (三月から四月にかけ

二四 雨を望む如くにその口を開き居たり。三 我の彼等  
 に向かいて笑しし時と雖も、彼等之を信ぜず、<sup>10)</sup>  
 わが顔の光地に墮ちざりき。<sup>11)</sup> 二五 我彼等の許に行  
 かん、欲みし時には、第一の席に就けり。されど  
 我、軍勢の立ち繞る王の如く坐したる折にも、な  
 お嘆く者の慰安者なりき。」

て)の晩い雨、即ち收穫時の雨は、穂に  
 實の入る頃の炎天には、最も望ましいも  
 のである。—10)それほど彼らは己のかか  
 る恩恵に値せぬ者であることを感じてい  
 た。「彼らが勇氣を失いし時、我は彼ら  
 に向かいて笑みぬ」と譯す人もある。  
 11)無効ではなかつた。

### 第三十章

ヨブ幸福の境涯より一朝にして不幸の底に陥りし現世の有爲轉變の甚だしきを述ぶ。

一 然るに今は齡少き者我を嘲笑う、彼等の父は  
 我之をわが羊群の犬と共に置くにだも足らずと思  
 いし者なるに。<sup>1)</sup> 二 彼等の手の力は、我にとりて無  
 きに等しく、彼等は生くるにすら値せずと思われ  
 たり。三 彼等は窮乏と飢餓とに衰え、患難と不幸

第三十章 (1)ヨブの不幸のひどさは、ド  
 ン底まで落ちて、社會から擯斥されてい  
 るこの上なく零落した人々にさえ嘲弄さ  
 れていいほどであつた。

四 　　とに憔悴やうれて荒野あれのを咬かめり。四 即すなわち草くさや樹きの皮かわを食くらい、樅むろの  
 五 　　根ねの食物しょくもつたりき。五 彼等かれらは是これを谷たにより奪うばい、その一つ  
 六 　　だに見み出いださば、聲こゑをあげて馳はせ寄よりぬ。六 彼等かれらは荒あれはて  
 七 　　たる谷たにの中なか、七穴つちあなの中なか、又は砂利じやりの上うえに住すめり。七 彼等かれらは  
 八 　　かくの如ごとき物ものの中うちにありて喜よろこび、茨いばらの下したにあるを樂たのしみと  
 九 　　傲なしたり。八 彼等かれらは、愚おろかなる者ものや、賤いやしき者ものの子こにして  
 一〇 　　全く世よに顯あらわれざりき。九 然しかるに今いまや我われ、彼等かれらの歌うたとなり  
 一一 　　その笑わら草いぐさとなれり。一〇 彼等かれら我われを厭いといて、我われより遠とほく離はなれ、  
 一二 　　わが面かほに唾つばきすることさえ憚はげらず。一二 蓋けだし彼等かれらの矢や毒つぼを開ひら  
 一三 　　きて我われを惱なやまし、わが口くちに嚮くつをかけ給たまいしなり。一三 我起われたち  
 一四 　　上あがるや、直たといちにわが患難かんなんわが右みぎに起おこり、わが足あしを掬すくいて波なみの  
 一五 　　如ごとくその小徑こみちより迫せまり來きたれり。一五 彼等かれらはわが道みちを崩くずし、  
 一六 　　我われを陷おとしれて、ついに勝かちしが、援助たすけをもたらず者ものなかり

2) 寧ろエニシダのこと。ムロはアラビアの荒野にも往々生える植物で、その根は非常に苦いが極く困つた人々は食用に供する  
 3) 自分が悪いため追い拂われて  
 4) 嘲弄の種。――5) 天主さえその  
 窺い知ることのできぬ御攝理によつて、私にかくも大なる艱難を送り給うたのであるから、彼らは私を苦しめても不當でないと思つてゐるのだ。――6) 私が何も答えることのできぬように。7) 軍勢が占領すべき都市に押しよせるように、また怒濤がドツと襲つて來るように、抵抗することができない。



一四 き。一四 彼等は石垣破れ門開きたるが如く、我に馳せかかり、  
 一五 押し寄せて我を窮しめたり。一五 我は無きが如くになれり。汝  
 は風の如くにわが望を吹き拂い給いぬ。わが繁榮は雲の如く  
 一六 に過ぎ去れり。一六 今わが魂はわが衷に絶え入るばかりにして  
 一七 患難の日我を捉えたり。一七 夜は苦痛わが骨に徹り、そは我を  
 一八 喰いて眠ることなし。一八 その多きによりてわが衣服は喰い盡  
 一九 され、<sup>8)</sup> そは下衣の襟の如くに我を締めつけたり。一九 我は泥  
 二〇 の如くになり、塵や灰に似るに至れり。二〇 我汝に向かいて叫  
 べど、汝我に聽き給わず、我立ちおれど、汝我を顧み給わ  
 二一 ず。<sup>9)</sup> 二 汝我に苛酷に變り給い、<sup>10)</sup> 情なき御手もて我に敵い  
 二二 給う。三 汝我を擧げ、さながら風に乗するが如くにして<sup>11)</sup> 激  
 二三 しく我を打碎き給えり。三 我は知る、汝は我を死に付し、生  
 二四 きとし生けるものの家と定められたる處<sup>12)</sup> に至らしめ給わ

8) 喰い盡されるとは醜くさ  
 れる意。衣服とは皮膚をさ  
 す。即ち痛い膿瘍が體中に  
 吹き出て、それが汚い破れ  
 衣を纏つていように見え  
 る、という意味。一) 彼の  
 罪なしとの宣言を、天主が  
 お聞きにならぬらしいこと  
 が、彼の苦惱の最大なるも  
 の。一) もと御好意を示し  
 給うたのに打つて變つて。  
 11) 次いで突如彼を深淵に投  
 げ落すために。一) すべて  
 の人の下るべき死者の住處  
 たる黄泉(よみ)。



二四 然れども汝は彼等<sup>13)</sup>を滅ぼす爲に御手を伸べ給わ  
 二五 ず、彼等倒れなば汝救い給わん。二五 我前に惱める者の爲  
 二六 に泣き、わが心貧しき者に同情を寄せたり。<sup>14)</sup> 我よき  
 二七 事を待望みしに、悪しき事我に至り、我光を待ち設けし  
 二八 に、闇出で來れり。二七 わが内臓は煮え返りて安きことな  
 二九 く<sup>15)</sup> 苦惱の日は我に追いつきたり。二八 我は怒らずして悲  
 三〇 しみつつ歩み、群衆の中に起ち上りて叫びぬ。<sup>16)</sup> 我は  
 三〇 龍の兄弟、駝鳥の仲間となれり。<sup>17)</sup> 三〇 わが皮膚は身にあ  
 三一 りながら黒くなり、わが骨は熱によりて枯れたり。三〇 わ  
 三二 が琴は悲嘆に、わが笛は泣く人の聲に變れり。」

### 第三十一章

ヨブ友人の不正なる批判に對して己を辯護し、自ら善しと思ふ行いを擧ぐ。

一 我はわが眼と契約を結びて、<sup>1)</sup> 處女のごとは夢にも思

13) 惡人共。—14) 彼はいつも惱める者に對して、今自分のために望んでいゝような同情を注がないことはなかつた。—15) 心の激動を煮えくり返る湯に譬えてある。—16) 大勢集まつてゐる法廷で、不當な虐待につき助けを呼び求めなければならぬ人のように。—17) 「龍」はヘブレオ語本では「山犬」。山犬と駝鳥は殊に夜啼く。「兄弟」や「仲間」といふ語は、こゝでは外觀の似てゐることをあらわす。

第三十一章 1) 自己辯明の結びと

二 わじとせり。<sup>2)</sup> 然らば天主上より我に如何  
 ばかり與し給うべきぞ、また全能者高き處  
 より如何なる物を讓り給うべきぞ。<sup>3)</sup> 三 惡し  
 き者には滅亡、不義を行ふ者には疏外なら  
 ずや。<sup>4)</sup> 彼はわが道を戀し、わが歩みを悉  
 く教え給わざることあらんや。<sup>5)</sup> 我もし虚  
 妄に歩み、わが足もし欺瞞に急ぎしことあ  
 りとせば、<sup>6)</sup> 願わくは正しき秤もて我を量  
 り、天主わが罪なきことを知り給え。<sup>7)</sup> わ  
 が歩みもし道<sup>4)</sup>を外れ、わが心もしわが眼  
 に従い、わが手にもし汚れつきたることあ  
 りとせば、<sup>8)</sup> 願わくは他人わが播きしを食  
 し、わが一族を根絶やしにせよかし。<sup>9)</sup> 九 わ

してヨブは、(一)不貞の罪(一一―一二節)、(二)部下や貧者や寡婦に對する冷酷(一三―二五節)、(三)偶像禮拜(二六―二八節)、(四)怨恨(二九―三〇節)、(五)客に對する冷遇(三一―三四節)など、身に覺えがないことを、縷々として説く。――<sup>2)</sup>ヨブは貞潔のことから述べ始める。これを一夫多妻の例が澤山あるのによく守ることは、それだけ一段と高く評價すべきである。――<sup>3)</sup>他の行動を取れば、彼は天主を離れ、最もひどい苦痛を受くべき者となつたである(二、三兩節)。また彼に義務を守らせたのは、天主の御前にあるという意識であつた(四節)。――<sup>4)</sup>天主の命じ給うた道。主の御掟。――<sup>5)</sup>これらの語は罪を犯すに至る順序をよく表している。靈魂がまず目によつて惹きつけられ、その命令を手が果たすのである。<sup>6)</sup>ブルガタ原文の Progenies の意味は「子孫」。しかし前後の関係でヘブレオ語本の如く「作物」と譯す人もある。

一〇 がありとせば、一〇願わくはわが妻他人の玩弄物となり、<sup>7)</sup>  
 他<sup>ほか</sup>の人之<sup>ひとこれ</sup>と臥<sup>ふ</sup>せよかし。二蓋<sup>けだ</sup>し是<sup>こ</sup>は憎<sup>にく</sup>むべき罪<sup>つみ</sup>にして、最<sup>さい</sup>  
 大<sup>だい</sup>の不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>なればなり。<sup>8)</sup> 三そは焼<sup>や</sup>きて滅<sup>ほろび</sup>亡<sup>び</sup>にまでも<sup>9)</sup> 至<sup>いた</sup>ら  
 一三 しめ、生<sup>しょう</sup>ずる物<sup>もの</sup>を悉<sup>ことごとく</sup>根<sup>ね</sup>より絶<sup>た</sup>やす<sup>10)</sup> 火<sup>ひ</sup>なり。一三 わが僕<sup>しもべ</sup>  
 婢<sup>しもめ</sup>、我<sup>われ</sup>と諍<sup>いさか</sup>いし時<sup>とき</sup>、我<sup>われ</sup>もし之<sup>これ</sup>と共<sup>とも</sup>に裁<sup>さば</sup>判<sup>き</sup>を受<sup>う</sup>くるを屑<sup>いさぎよ</sup>しと  
 一四 せざりしことありとせば、<sup>11)</sup> 一四 天主<sup>てんしゆ</sup>の審<sup>さ</sup>判<sup>ば</sup>かんとして起<sup>た</sup>ち上<sup>あが</sup>  
 り給<sup>たま</sup>う時<sup>とき</sup>、抑<sup>おさ</sup>々<sup>そ</sup>我<sup>われ</sup>如何<sup>いか</sup>にせんや、その問<sup>と</sup>い給<sup>たま</sup>う時<sup>とき</sup>何<sup>なん</sup>と答<sup>こた</sup>え  
 一五 んや。一五 我<sup>われ</sup>を胎<sup>たい</sup>内<sup>ない</sup>に造<sup>つく</sup>り給<sup>たま</sup>いし者<sup>もの</sup>、また彼<sup>かれ</sup>をも造<sup>つく</sup>り給<sup>たま</sup>いし  
 に非<sup>あら</sup>ずや。同<sup>どう</sup>一<sup>いつ</sup>なる者<sup>もの</sup>、我<sup>われ</sup>を胎<sup>たい</sup>内<sup>ない</sup>に形<sup>かた</sup>成<sup>ち</sup>り給<sup>たま</sup>いしに非<sup>あら</sup>ずや。  
 一六 我<sup>われ</sup>もし貧<sup>まが</sup>しき者<sup>もの</sup>にその望<sup>のぞ</sup>む物<sup>もの</sup>を拒<sup>こほ</sup>み、寡<sup>やもめ</sup>婦<sup>め</sup>の眼<sup>め</sup>をして待<sup>ま</sup>  
 一七 たしめしことあり、一七 獨<sup>ひと</sup>りわがパン片<sup>きれ</sup>を食<sup>しょく</sup>して、孤<sup>みなしこ</sup>兒<sup>こ</sup>に之<sup>これ</sup>  
 一八 を分<sup>わか</sup>ち食<sup>しょく</sup>せしめざりしことありとせば、一八 蓋<sup>けだ</sup>し、憐<sup>あわれ</sup>憫<sup>み</sup>は

7) ヘブレオ語本「わが妻は他の  
 人の臼磨き女となり」(8) 私通  
 はまず第一に他人の権利を侵害  
 することとされていた。(9) ヘ  
 ブレオ語ではアバツドーン、即  
 ち死者の住處よみに至るまでも  
 10) すべての所有物をなくする。  
 11) 昔奴隸は何の權をも持つてい  
 なかつた。しかしヨブは萬人の  
 審判者(一四節)にして創造主  
 (一五節)なる天主のことを考  
 えた。かように眞の神の崇敬は  
 人間の品位を重んずることと結  
 びついているのである。



一九 わが幼き頃よりわが身と共に成長し、我と共にわが母の胎内よ  
 り出で来りしなり。12) 一九また我もし衣服なくして死せんとする  
 二〇 者や、覆う物すらなき貧しき者を蔑みしことあり、二〇 その脇  
 腹13) もし我を祝せず、彼もしわが羊の毛によりて温まらざりし  
 二一 ことあり、二一 我已が門に居る長者なることを見し時にも、孤兒  
 二二 に向かいて手を舉げしことありとせば、二三 願わくはわが肩關節  
 二三 より落ち、わが腕14) その骨と共に折れよかし。二三 それ、我は常  
 二四 に天主を、我を襲わんとする大濤の如くに畏怖れたり、その重  
 二五 壓には我得堪えざりき。二四 我もし黄金をわが力と思ひ、純金に  
 二六 向かいて「わが恃みよ」と云いしことあり、二五 わが富の大いな  
 二七 るを喜び、わが手に多く得たりとて喜びしことあり、二六 我もし  
 二七 日の照り、月の輝きつつ沈むを見て、二七 心竊かに喜び、わが  
 二八 手にわが口を接しことありとせば、16) 二八 是は大いなる不義に

12) ヘブレオ語本では「我  
 わが幼きより、父の如く  
 之（孤兒）を育て、わが  
 母の胎より寡婦を庇いた  
 り。」—13) これにはまず蔽  
 う物が必要である。  
 14) 無法にも振りあげたわ  
 が腕。—15) 日月崇拜。  
 16) 接吻によつても偶像神  
 に禮拜の意を表わした。  
 そして本當の接吻ができ  
 ない時には、自分の手に  
 接吻して、いわゆる投げ  
 キツスのようなことをし  
 た。星辰禮拜の時には殊  
 にそうで、ヨブの周圍で  
 はそれが盛に行われてい  
 たのである。



二九

して、最高き天主を否むことなり。二九また我も

し我を憎む者の滅ぶるを嬉しとし、災厄の彼に

三〇

下れるを喜びとせしことありとせば、三〇蓋し我

は彼の生命に呪咀をかけて、わが口を罪の爲に

三一

用いしことなし。三一またわが幕屋の人々、我

等に彼の肉を分ち與えて、飽かしめん者は誰

三二

ぞ」と云わざりしとせば、三二他所人は外に宿ら

ず、わが門は旅人に向かいて開かれたりき。

三三

三三我もし人の如く、18) わが罪を隠し、わが不義

を胸に秘め、三四大群衆を恐れ、親戚の輕蔑に臆

三四

し、却つて沈黙し、家を出でざりしことありと

せば、19) 三五願わくは誰か我に聽く者を與えよか

三五

し、是、全能者がわが望を聽き、20) 審判者御自

17) 敵の。わが家人はわが敵を呪い、出来るならその肉を掻き裂いてやりたいと思つていた。ヨブと共に住んでいた人々は皆、家族も召使も、こういう風で、いつも主人と一緒に暮らしたいという熱望と愛とを表わしたのである。ヘブレオ語のテキストによつて、「ヨブの饜應の肉に飽くを得ざりし者はどこにあるうか。敵でさえ飽くことができたのである。」と説く人々もある。

18) ヘブレオ語「ケ・アダム」は「アダムの如く」という意味らしい。そうとすれば、このくだりは人祖が自分の罪を隠そうとしたことを明らかに暗示しているわけである(創三・一一)。19) 最も眞實らしい意味は、ヨブが不當の罪を被せられても、沈黙を守つて、敵の仕返しを受けないために外出しなかつたということ。20) ヘブレオ語本「わが花押(かきはん、文字通り云えばわがタ

三六 書に<sup>21)</sup>録し給わん爲なり。三六さらば我之をわが  
 三七 肩に擔い、之を冠の如くわが身につけん。三七我は  
 わが一步毎に之を言明し、侯に差出す如くに之を  
 三八 差出さん。<sup>22)</sup> 三八わが畑叫びて我を責め その畝之  
 三九 と共に泣き、三九我金を出さずしてその實りし物を  
 四〇 食し、之を耕したる者の心を苦しめしことありと  
 せば、四〇願わくはわが爲には小麥の代りに薊生え  
 大麥の代りに茨生えよかし。」ヨブの言葉は終れり。

### 第三十二章

エリウ、ヨブとその友等とに對して怒り、また己が立場を語る。

一 是に於いて是等三人の者、ヨブに應うることを  
 やめたり、其は彼己を義しと思えるが故なり。  
 二 然るにラムの一族なるズ人<sup>1)</sup>、バラケル<sup>2)</sup>の子

ウ)ここにあり。願わくは全能者我に答  
 え給え。」タウはヘブレオ語のアルファ  
 ベットの最後の文字で、もとは十字形を  
 していて、時々署名の代りに用いられた  
 らしい。—<sup>21)</sup>訴訟狀を。—<sup>22)</sup>ヨブは作成  
 されたその書を承認した後自ら天主の御  
 前で聲高らかに讀みあげ、主に一條一條  
 反駁して頂こうとする。

第三十二章 1)フスの地から程遠からぬ  
 所に住んでいたと思われるアラビア族。  
 (創二二・二二参照。) —<sup>2)</sup>「天主よ、祝し  
 給え」の義。

三 エリウ、<sup>3)</sup> 激昂し且憤れり、即ちヨブに對して彼が天主の御前に  
 義しと云いしに由り、<sup>4)</sup> 怒り、<sup>5)</sup> またその友等に對しても彼等が道  
 理に適える答を見出し得ずして、ただヨブを罪ありと云いしに由り  
 怒りしなり。<sup>6)</sup> かくてエリウはヨブの語りおる間待ち居たり、そは  
 語りおる者己よりも年長なりしが故なり。<sup>7)</sup> 然れども彼かの三人の  
 答うること能わざるを見るや、激しく怒れり。<sup>8)</sup> ヲズ人バラケルの  
 子エリウ、乃ち應えて云いけるは、「我は齡少く、汝等は年上な  
 り、故に我頭を垂れて、己が意見を汝等に述ぶることを憚りき。<sup>9)</sup> 蓋  
 は我、年上なる者宜しく語るべし、齡多き者宜しく智慧を教うべし  
 と思いたればなり。<sup>10)</sup> 然れども、わが見る所によれば、人々の衷に  
 は靈あり、全能者の靈感こそ了悟を興うるなれ。<sup>11)</sup> 長壽なる者必ず  
 しも智者たるに非ず、年長なる者必ずしも道理を辨うるに非ず。  
 一〇 されば我云わん、我に聽け、我も亦わが智慧を汝等に示さん。

3)「わが天主そのもの」の義。—4)彼は天主の正義を詰つて自分の無罪を公言した。—5)エリウはヨブとその友人等との談話を親しく耳に聞いていたが、年長者への敬意から口を挿まずにいた。しかし今や天主の靈感を蒙つたように思い、それを打ち明けたい衝動を感じたのである

二 二夫れ、我は汝等の言を待ち、汝等の言い争える間、汝等の分別を聴きたり。二三しかして我、汝等が何事かを云えりと思える間、考えめぐらしけるが、わが見る所によれば、汝等の中にヨブを説き伏せて彼の言に答うることを得る者なし。二三恐らく汝等は云わん、〃我等智慧を見出したる、彼を棄てたるは天主にして、人にあらず〃と。6) 一四彼は我に何事も云わざりき、7) されば我も亦汝等の言いし如くには彼に答えじ。8) 一五彼等は怖じて最早答えず、語ることをやめたり。一六かく我待ちおりしに、彼等物言わず、立留まりて復答えざれば、一七我も亦わが分を答え、わが知れる所を示さん。一八実に我は云うべき事に満ちわが内部に氣頻りに逸り苦しきばかりなり。一九視よ、わが腹は、出口なくして新しき壘り、を破る新酒の如し。二〇我は語りて少しく息を入れん、わが唇を開きて答うる所あらん。二一我は人を偏り見じ、また天主を人に匹儔えじ。10)

6) 彼の苦しみは人間からではなく天主から、即ち彼が行つた悪の罰として來たのである。  
7) 即ち、彼は私の言を少しも反駁しなかつた。—8) ヨブに答えることができるが、かの三人の友人とは全く違つた風に。  
9) ヘブレオ語「革袋」。—10) ヨブがしたように、天主に責任があると云わず。



が創造主の我を連れ去り給うべきかを知らざるなり。」

### 第三十三章

エリウ、ヨブが己を罪なしとしたることを責む。

二「さればヨブよ、わが語る所を聴け、わがすべての言に耳を傾けよ。二視  
 三よ、我わが口を開けり、わが口の中にてわが舌を動かさん。三わが言は卒  
 四直なる心より出ず、わが唇は雑念なき意見を述べん。四天主の霊我を創造  
 五り、全能者の氣息我を生かせり。一五汝もし能わば我に答えよ、わが面を肩  
 六して立て。六視よ、天主は我をも亦汝と等しく創造り給えり、我も亦同じ  
 七粘土もて形成られたり。七然れどもわが奇説汝を愕かすことなかれ、わが  
 八辯舌汝を壓することなかれ。八汝今わが聴ける所にて語り、我汝の言う聲  
 九を聴けり。曰く、九我は潔くして、科なく、汚れなし、我には不正なる  
 一〇事あらず。一〇されど主我に咎むべき所を見出し、それによりて我を御自分  
 一一の敵と見做し、二わが足を械に嵌め、わがすべての小徑を窺い給えり。」

### 第三十三章

1) エリウは天主御自らその思想を吹き込み給うたことを確信している。この意味はまた「我も汝の如く天主に造られたるものなり」と解することもできる。

と。2) 一三抑々是こそは汝の義しからざる点なれ。3) 我汝に

答えん、天主は人よりも偉大に在す、と。一三彼汝のすべて

の言に答え給わざればとて、汝彼と云い争うや。4) 一四天主

は一度語りて、同じ事を二度は繰返し給わず。5) 一五深き睡

眠人々を襲いて、彼等臥床に眠れる時、夢により、夜の

幻の中にて、一六主人々の耳を開き、之にその知るべき事

を教え授け、6) 一七以て人をその爲す所より離れしめ、之を

傲慢より解放ち、一八その靈魂を滅亡より、その生命を劍に

かかることより救い出し給う。一九主はまた床の中の苦しみに

によりて懲らし給い、そのすべての骨をして枯れしめ給う。

二〇彼の生ける間、パンは彼に、その前に欲みし食物は彼の

心に、厭わしき物となる。二三その肉は落ちて、覆われたり

し骨は露れ、7) 二三その靈魂は滅亡に、その生命は死をもた

2) 本一三・二四—二七参照。

3) 汝が天主を不義だと云つて責めるのは、汝が正しくない。

4) 正しい信仰を有する人は、天主がその意味を明らかに教え給

わずとも、主の慈しみ深い御攝理を信頼している。1) 天主は

さまざまの方法で人間に語り給う。エリウは、啓視によるのと

(一五—一八節)、病氣によるのと(一九—二二節)、友人の

忠告によるのと(二三—二八節)この三種を擧げる。1) 6) フアラ

オヤナブコドノソルなどに對するように、豫言的な夢で警告し

給う。1) 7) ヨブに對するあてこすり。

三三	らす者 <sup>もの</sup> の <sup>8)</sup> に近づく。三三 茲にもし千中の一なる天使 <sup>てんし</sup> ありて、
三四	彼の爲 <sup>ため</sup> に執成 <sup>とりな</sup> し、その人の義 <sup>たゞ</sup> しきことを告げんには、二四 主 <sup>しゆ</sup> 彼 <sup>かれ</sup> を憐 <sup>あわれ</sup> みて曰 <sup>のたま</sup> うべし、〃彼 <sup>かれ</sup> を救 <sup>すく</sup> いて、滅亡 <sup>ほろび</sup> に陥 <sup>おち</sup> らざらしめよ。
二五	我 <sup>われ</sup> 彼 <sup>かれ</sup> に恵 <sup>めぐみ</sup> を與 <sup>あた</sup> うべき所 <sup>ところ</sup> を見出 <sup>みいだ</sup> せり。10) 二五 その肉 <sup>にく</sup> は苦患 <sup>くるしみ</sup> によりて瘠 <sup>や</sup> せ落 <sup>お</sup> ちたり、彼 <sup>かれ</sup> をしてその若 <sup>わか</sup> き日 <sup>ひ</sup> の様 <sup>さま</sup> に歸 <sup>かえ</sup> らしめよ。〃
二六	と。二六 彼 <sup>かれ</sup> 天主 <sup>てんしゆ</sup> に祈 <sup>いの</sup> らん、主 <sup>しゆ</sup> 之 <sup>これ</sup> に恵 <sup>めぐみ</sup> を垂 <sup>た</sup> れ給 <sup>たま</sup> わん。彼 <sup>かれ</sup> は喜 <sup>よろこ</sup> びて主 <sup>しゆ</sup> の御面 <sup>みかほ</sup> を見奉 <sup>みたま</sup> つ、己 <sup>おの</sup> が義 <sup>たゞ</sup> しきを再 <sup>ふた</sup> び人 <sup>ひと</sup> に認 <sup>みと</sup> めらるべし。
二七	二七 彼 <sup>かれ</sup> 人 <sup>ひと</sup> 々 <sup>々</sup> を顧 <sup>かえり</sup> みて云 <sup>い</sup> わん、〃我 <sup>われ</sup> は罪 <sup>つみ</sup> を犯 <sup>おか</sup> し、寔 <sup>まこと</sup> に過 <sup>あやま</sup> てり、されどそれ <sup>それ</sup> に相 <sup>そう</sup> 當 <sup>とう</sup> する報 <sup>むく</sup> いを受 <sup>う</sup> けざりき。〃と。11) 二八 主 <sup>しゆ</sup> は彼 <sup>かれ</sup> の
二八	靈 <sup>たましい</sup> 魂 <sup>い</sup> を救 <sup>すく</sup> い給 <sup>たま</sup> えり、そは之 <sup>これ</sup> が滅 <sup>ほろ</sup> びに陥 <sup>おち</sup> らずして、生 <sup>い</sup> きて光 <sup>ひか</sup>
二九	明 <sup>り</sup> 12) を見 <sup>み</sup> んためなり。二九 視 <sup>み</sup> よ、天主 <sup>てんしゆ</sup> は是 <sup>これ</sup> 等 <sup>ら</sup> 一切 <sup>さい</sup> の事 <sup>こと</sup> を、各 <sup>おの</sup> 々 <sup>々</sup>
三〇	の人 <sup>ひと</sup> に三 <sup>み</sup> 度 <sup>たび</sup> 宛 <sup>づつ</sup> 13) 行 <sup>おこな</sup> い、三〇 かくて彼 <sup>かれ</sup> 等 <sup>ら</sup> の靈 <sup>たましい</sup> 魂 <sup>い</sup> を滅 <sup>ほろ</sup> びより呼 <sup>よ</sup> び戻 <sup>もど</sup>
三一	し、生 <sup>い</sup> ける者 <sup>もの</sup> の光 <sup>ひかり</sup> 明 <sup>り</sup> もて之 <sup>これ</sup> を照 <sup>て</sup> らし給 <sup>たま</sup> う。14) 三一 ヨブよ、注 <sup>ちゆ</sup> 意 <sup>い</sup>

8) 死をもたらず者とは、斷末魔の苦しみか、死の天使。  
 9) 主が無数の天使の内から使者としてお遣しになる一位。これを苦しんでいる者に苦しみの意義を正しく説明する善友と解する人もある。――10) 忍苦には償いの効果がある。即ち天主はそのために苦しみを許容し給うのである。――11) 彼は嚴罰を受けても、なお生存する價値あることを認めた。  
 12) 光明とは、幸福という意味をも含む人生の光明。  
 13) 繰返して。――14) 苦しみのもう一つの目的は、天主から報賞を受けるに足る功勳

三三 して我に聽け、わが語る間黙しおるべし。三三 されど汝にもし云うべき事あらば、我に答えよ。語れ、蓋は我汝の義しと思われんことを欲めばなり。15) 三三 またもし無くば、我に聽け、黙してあれ、我汝に智慧を教えん。」

### 第三十四章

エリウ、ヨブに胃瀆の罪を歸し、天主の力と正義とを稱う。

二一 一 エリウ乃ち言を發して、なおもかく云えり、二三 汝等智者よ、わが言を聽け。汝等學者よ、我に耳を傾けよ。三三 夫れ、耳は言を試し、  
 四 口は味によりて食物を辨う。1) 四 いざ、我等の爲に義しきを選び、  
 五 我等諸共に何が最も善き事かを見出さん。五 夫れ、ヨブは云えり、  
 六 我は義し、されど天主は我の義しきを枉げ給えり、2) 六 即ち我を審判き給うに虚偽あり、我罪なきに、勢烈しき矢を身に浴びたり。3) 八 惡と。七 何人かヨブの如くならん、彼は胃瀆を水の如くに飲み、3) 八 惡

を積むこと。―15) 彼は三人の友人のよう  
に、たゞ罪を責めよ  
うとはしない。

### 第三十四章 1) 本一

二・一一。―2) 苦し  
みが常に罪の罰に過  
ぎないとすれば、天  
主は私に對して正し  
くない。二七・六以  
下参照。―3) 本一五  
・一六及びその註參  
照。



九 事を働く者と交り、不敬なる者と共に歩むなり。九に彼は云えり、  
 一〇 // 人は天主と共に歩むとも、その御意に適う能わず。// 一〇さ  
 一 れば汝等心ある人よ、我に聴け。天主決して悪しきに非ず、全能者  
 二 決して不義なるに非ず。二蓋は、人の所行に應じて之に與え、各人  
 三 の行為に循いて之に報い給えばなり。三寔に天主は故なくして罪あ  
 四 りとし給わず、全能者は義しきを枉げ給わず。三彼他に誰をか地に  
 五 立て給いし、誰をか造り給える世に置き給いし。四主もし彼に御  
 六 心を向け、その靈と氣息とを御許に引き取り給わば、一五あらゆる肉  
 七 物悉く滅び去り、人も灰に歸らん。一六故に汝もし悟る力あらば、云  
 八 いし所を聴き、わが言の聲に耳を傾けよ。一七正義を愛せざる者、豈  
 九 癒やさるるを得んや。汝いかにして義しき御者をかくまで非とする  
 一〇 や。一八彼は王に向かいて // 不忠なる者よ // といひ、長等を // 悪し  
 一一 き者 // と呼び、一九諸侯たりとて偏り給わず、暴虐の君とて、その貧

4) ヨブがこういう事を云つたのは、本九・二二。二一・七。三〇・二六以下。5) 世界が天主の御作でその所有物であるなら、それを思召のままに取扱われてい  
 い譯だから、どうさ  
 れても不當とは云えない。1) 汝はもし天主とその御正義とを難ずるなら、どうして主から善い事を期待できようか。

しき者と争う時には之を顧み給わずら。蓋はいずれも皆その御手に造られたる者なればなり。8) 彼等は忽ちにして死し

民は夜半に愕き騒ぐ間に逝き、強暴なる者も人手によらずして奪い去らる。9) 蓋し主の御眼は人々の道の上にある、主

はそのすべての歩みを憐し給うなり。10) 悪事を働く者の身を隠すべき、暗黒もなく死の蔭もなし。蓋は天主の御許に至

りて審判を受くることは、最早人の力の及ぶ所に非ざればなり。10) 主は千々に、數知れぬまで打碎き、彼等の代りに他

の人々を立たしめ給わん。11) 即ち主は彼等の所行を知り給うに由り、夜を齎し給い、彼等滅ぶ。彼は人の見る所にて

彼等を悪人の如くに撃ち給えり。12) 彼等は云わば故尊に主を離れ、そのすべての道を辨えんとせず、乏しき者の叫喚を

して主の御許に至らしめたり。かくて主貧しき者の聲を聴き

て奪い去らる。9) 蓋し主の御眼は人々の道の上にある、主はそのすべての歩みを憐し給うなり。10) 悪事を働く者の身を隠すべき、暗黒もなく死の蔭もなし。蓋は天主の御許に至りて審判を受くることは、最早人の力の及ぶ所に非ざればなり。10) 主は千々に、數知れぬまで打碎き、彼等の代りに他の人々を立たしめ給わん。11) 即ち主は彼等の所行を知り給うに由り、夜を齎し給い、彼等滅ぶ。彼は人の見る所にて彼等を悪人の如くに撃ち給えり。12) 彼等は云わば故尊に主を離れ、そのすべての道を辨えんとせず、乏しき者の叫喚をしてして主の御許に至らしめたり。かくて主貧しき者の聲を聴き

て奪い去らる。9) 蓋し主の御眼は人々の道の上にある、主はそのすべての歩みを憐し給うなり。10) 悪事を働く者の身を隠すべき、暗黒もなく死の蔭もなし。蓋は天主の御許に至りて審判を受くることは、最早人の力の及ぶ所に非ざればなり。10) 主は千々に、數知れぬまで打碎き、彼等の代りに他の人々を立たしめ給わん。11) 即ち主は彼等の所行を知り給うに由り、夜を齎し給い、彼等滅ぶ。彼は人の見る所にて彼等を悪人の如くに撃ち給えり。12) 彼等は云わば故尊に主を離れ、そのすべての道を辨えんとせず、乏しき者の叫喚をしてして主の御許に至らしめたり。かくて主貧しき者の聲を聴き

の天主はえこひいきなく罰し給う。1) 申一〇・一七。代下一九・七。智六・八。集三五・一六。徒一〇・三四。羅二・一一。加二・六。弗六・九。西三・二五。彼前一・一七。1) 9) 目に見えぬ天主の使者たる病氣によつて。暗にエジプトの禍をさしているのである。10) 天主は人間をお知りになるのに、人間のする如く、長くお調べになる必要がない。だからヨブが天主を相手に自分の長所を論ずるのは愚かな話である。11) 災難。

二九

給えり。抑々彼平安を賜う時には、誰か之を

非とする者あらんや。彼國民に對し、またすべ

ての人に對し、御面を隠し給う<sup>12)</sup>時には、誰か

能く之を見る者あらんや<sup>13)</sup>。彼は民の罪の爲

に、善を装う人をして世を治めしめ給う<sup>14)</sup>。

我かく天主に向かいて述べたるに由り<sup>15)</sup>また

汝をも妨げじ<sup>16)</sup>。我もし誤りたらば、汝我に

教えよ。我もし不義を語りしならば、また累ね

て云わじ。事汝の意に適わざればとて、天主

之を汝に求め給わんや<sup>17)</sup>。夫れ、語り始めしは

汝にして、我にあらず。汝もし更によき事を知

れるならば、請う、語れかし。思慮ある人々

は我に語るべし<sup>18)</sup>。智慧ある人々は我に聴くべ

12) 怒り給う。——13) 天主がすぐに關與し給わ

ずとも、主を是非してはならない。主はい

つか必ず正義の審判を行い給う。——14) 天主

はたとい暴君に人民を支配させ給うても、

不當ではない。それは皆ののではなくても、

大勢の人の罪のためで、その暴君も罰せら

れずにはいないだるう。——15) 私が天主の御

前で罰を受けずにすむように。——16) 汝も答

えるに當つて同様にせよ。——17) *eam* 之と

いう代名詞は、三二節の *iniquitatem* 不義

という語をさすとしか考えられない。汝が

不義と稱すること。「汝が不當と思ひ、汝

の氣に入らぬ事だからといつて、天主はそ

れを要求せずに置き給わなければならぬこ

とがあるるか」との意。——18) 分別のある人



三五 し。されどヨブは愚なる事を語れり、その言は取りとめもなく聞えたり。三六 わが父よ、<sup>19)</sup>願わくはヨブの終まで試みられんことを。悪しき人を容赦し給わされ。三七 彼その罪に冒瀆を重ねしに由り、なお少時の間我等の中に縛められてあれ。然る後彼その言もて、また天主を御審判に呼び奉れかし。<sup>20)</sup>

### 第三十五章

ヨブの説に對し、天主の賞罰は直には非ずして思召の時に行わるといふエリウの答。

二一 エリウは更にかく云えり、三 汝己が思念を正しと思いて、  
 四 我は天主よりも義し<sup>1)</sup>と云うや。<sup>1)</sup> 三 即ち汝は云えり、  
 五 義しき事も汝<sup>2)</sup>の御意に適わず、また我罪を犯したりとて、  
 六 汝に何の利害かあらん。<sup>3)</sup> 四 されば我汝の言に對し、また汝  
 七 と共にある汝の友人等に對して、  
 八 答えん。<sup>4)</sup> 五 天を仰ぎ見、汝  
 九 より高き空を眺めよ。<sup>5)</sup> 六 汝罪を犯すとも、彼に何の害をか加う

第三十五章 1) ヨブはそう  
 は云わなかつたものの、彼の云つた事はそういう考えから出ている。 2) 天主。  
 3) ヴルガタ原語 Proderit (益する)。しかしこゝは汝には何の損得もないという意。 4) 彼らは汝の言を反



一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七

るを得ん、汝の不義累なるとも、彼に對して何をか為し得ん。  
 七 また汝義をなすとも、彼に何をか與うるを得ん、彼汝の手  
 より何をか受け給わん。八 汝の悪は汝の如き人を害し、汝の  
 義は人の子を助け得べきのみ。九 彼等<sup>6)</sup>は虐ぐる者の多きに  
 よりて叫び、強暴なる者の腕の力によりて嘆かん。一〇 されど  
 誰一人云う者なし、<sup>1)</sup>天主は何處に在すや、彼は我を造り、  
 夜<sup>7)</sup>に歌を賜いし者、二地の獸に越えて我等に教え、空の鳥  
 に優りて我等に知識を授け給う者なり。〃と。一二 かの時に  
 は<sup>8)</sup>彼等叫ばん、されど悪しき者の傲るによりて、主聽き給  
 わざるべし。一三 かくの如く天主は故なくしては聽き容れ給わ  
 ず。全能者は人各々の事情に御目を留め給う。一四 汝<sup>9)</sup>彼<sup>10)</sup>を  
 さず<sup>1)</sup>と云うと雖も、彼の御前にて審判あり、ただ彼を待  
 て。一五 夫れ、彼は今御忿怒を發し給わず、また惡に對しても

駁出來なかつたから。  
 5) 天主は人の罪によつて害を、善行によつて益を受け給うことはないが、その造り給うた人間は受ける。  
 6) 貧者や虐げられた人々。  
 7) 不幸という夜。一8) 患難の時。一9) 即ち、惡人共が得意になつてゐる時すぐにではなく、主が御榮えを揚げようと定めておいでになるその時に、お聽きになる。  
 10) 即ち汝の云い分を主に任せして、時が來れば遺憾なく示される天主の御正義を待て。

一六 厳しく報復い給わず、一六さればヨブは空しく口を開き、思慮なき語を累ぬるなり。」

### 第三十六章

エリウなおも天主の正義と御力とを述ぶ。

一〇 一 エリウまた語を繼ぎてかく云えり、二 少しく我に容せ、我汝に説  
 三 き示さん、蓋はなお天主の爲に<sup>1)</sup>云う事あればなり。三 我本より<sup>2)</sup>  
 四 わが知れる所を繰返し、わが創造主の義しきことを證せん。四 寔に  
 五 わが言は虚偽ならず、我全き知識を汝に證せん。五 天主は御自分も  
 六 力ある者に在せど、力ある者を棄て給わず。六 但惡しき者を救い給  
 七 わず、貧しき者に正義を行い給う。三) 彼は義しき者より御眼を離し  
 八 給わず、之を王等の如く永久に王座に置き、彼等を高め給う。四) 八ま  
 九 た彼等もし鎖に繋がれ、貧困の繩に縛めらるることあらば、五) 九 主彼  
 等<sup>ら</sup>にその所行と罪惡とを示し給わん、是、彼等が道ならぬ事をなし  
 一〇 たるに由りてなり。六) 一〇 彼また彼等の耳を開きて、之を戒め、その

第三十六章 一) 天主

に有利なことを。

2) 自然に顯れている

ような法則から。

3) 天主はえこひいき、

せず、各人にその業

に従い報い給うこと

では實に正しい。

4) ヨブの如く。

5) 天主が彼等を憎み

給うとの意を含むヨ

ブの言を訂正す。

6) 善惡に對する賞罰

二 不義より立歸るべきことを告げ給わん。の 一 彼等も  
 し聽きて従わば、その目を幸福に、その年を榮華の  
 中に、終うるを得ん。二三されどもし聽かずば、劍に  
 よりて燼れ、愚にして滅びん。の 八 表面を飾る者と  
 狡猾なる者とは天主の御忿怒を招かん、また彼等も  
 縛められたりとの 叫ぶことをせざるべし。一四その  
 靈魂は暴風の中に、その生命は男娼と共に滅びん。の 10  
 一五 主は貧しき者をその困窮より救い、患難の時にそ  
 の耳を開き給わん。の 11 一六されば主汝を、狭くして下  
 に底なき患難の口より廣き所に救い出し給わん、の 12  
 一七 かくて汝の食卓に載る物は、膏に充滿つべし。一七 汝  
 の訴訟は悪しき者の如くに審判かれたり、汝その訴  
 訟に對する判決を受くべし。の 13 一八されば汝忿怒に打

の多少眠つてゐる良心を天主が搖り起  
 し給う苦しみによつて。一八)天主の有  
 益な御意圖を水の泡にした時に始めて  
 天罰を下し給う。一九)苦しみの絆(き  
 ずな)で以て。一〇)バールを奉ずる人  
 々のように。一一)天主は苦しみによつ  
 て教え給い、彼はその貴い教訓から益  
 を受けるが、心の曲つた者は苦しみに  
 より却つて頑冥になる(一三—一四節)  
 12)患難を、口に獲物をくわえている野  
 獣に見たててある。廣き所とは救いの  
 象り。一三)もし汝が悪人の心がけを以  
 て、己の現状を判断し、心に痛悔して  
 悪かつたと認めないなら、汝も永劫に  
 罰せられるだろ。



一九 負けて、人を虐ぐるなかれ。また献物<sup>14)</sup>の多きによりて  
 迷うなかれ。一九 患難なき汝の偉大、<sup>15)</sup>及び力強き者を  
 二〇 悉く棄てよ。二〇 人々の交互入り行く夜を慕うなかれ。<sup>16)</sup>  
 二一 慎しみて悪に傾くなかれ、汝は悲惨なる境遇に陥りて  
 二二 より以来、之に従うことを始めたり。<sup>17)</sup> 二二 視よ、天主は  
 二三 御力卓れ給う、立法者の中一人として彼の如き者はあら  
 二三 ず。二三 誰かその道を究め得る者あらんや。また誰か彼に  
 二四 向かいて、<sup>18)</sup>「汝不義を行い給えり」と云い得る者あらん  
 二四 や。二四 汝その御所行を知らざること憶うべし。<sup>18)</sup> 人々  
 二五 之を讚め歌えり。二五 萬人彼を仰ぎ見、各々之を遙かより  
 二六 打目戍るのみ。<sup>19)</sup> 二六 視よ、天主は偉大にして、我等の知  
 二七 識を超ゆ。その御年数も計り知れず。二七 彼雨の滴を引上  
 二八 げ、驟雨を瀧津瀬の如くに注ぎ給えば、<sup>20)</sup> 二八 そは全天を

14) 償いのための献物。即ちそれは  
 忍耐痛悔を以て苦しみを甘受する  
 ことにほかならない。—15) 自分を  
 正しいとして誇るその傲慢。  
 16) 汝の友人達 (Populi) にひどく  
 やりこめられたのが面白くないか  
 らと云つて、あまり死に憬れては  
 ならない。これを「すべて (Populi)  
 (Populi) を奪い去る死に、ヨブがあ  
 まり憬れないように—」と説明す  
 る人もある。—17) 汝は天主の御攝  
 理に對し僭越にも苦情を云つてそ  
 れにより罪を犯した。—18) ヘブレ  
 オ語本によれば、「汝主の御業を  
 讚め稱うることを忘れざれ。」  
 19) 遠くから目につくものは、見の  
 がすことがない。—20) 雨の出來方。  
 水は蒸發で下から天に引きあげら



二九 覆う雲の中より流れ下る。二九 彼、雲を天幕の如く  
 三〇 に展べ、三〇 上よりその電光を閃かさんとし給う時  
 三一 は、21) 海の涯をも覆い給う。三二 蓋し彼は是等によ  
 りて民を裁き、多くの人に食物を賜うなり。22)  
 三三 彼はその御手の裡に光<sup>23)</sup>を隠し、之に命じて復  
 來らしめ、三三 それが彼の有にして、之に乗るを得  
 給うことを、御自分の友に告げ給う。24)

### 第三十七章

エリウ語を繼ぎ、天主の奇しき御業によりてその御智慧と御力とを示す。

一 之を思えばわが心戦き、動きてその處を出  
 二 ず。二 汝等耳を傾けて、彼の御聲<sup>1)</sup>の恐ろしきと、  
 三 その御口より出ざる響とを聽け。2) 三 彼は諸天<sup>3)</sup>の  
 下を擣し、その電光を地の果にまで及ぼし給う。

れ、凝結して雲になる。—21) 天主が雷鳴  
 と電光との裡に、シナイ山に現れ給うた  
 ことを思い合せよ。—22) 天主はまた雲中  
 から田野を活々とさせる雨をも恵み給う  
 23) 電光。—24) 稻妻として不敬なる者の頭  
 を碎き罰する光は、天主を愛する人々に  
 は、その上りゆくべき天つ故里特有の榮  
 光を偲ばせる。

### 第三十七章

1) 雷鳴を天主の御聲と見な  
 してある。—2) この語から推定して、エ  
 リウがちようど話している時、その頭上  
 にはためいていた雷のことを述べている  
 のだという人も時々ある。—3) ヘブレオ

四 その後音ありて鳴り響き、彼その御稜威の聲を轟かし給わん、その御聲は聞ゆれども、彼を見出すことは能わざるべし。(4) 五 天主は奇しくもその御聲を轟かし給わん、彼は、偉大にして究め知るべからざる事をなし給う。(6) 六 彼は雪に命じて地に降らしめ給う、冬の雨(5)及びその御力の豪雨に對しても亦然り。(7) 七 彼はすべての人の手を封じ給う、(8) 是、いづれの人も主の御業を知らん爲なり。(8) 八 獸は隱場に入りて、その洞に留まらん。(9) 九 暴風は奥地より來り、寒さは北より來らん。(10) 一〇 天主の息吹に霜結び、再び夥しく水流る。(11) 二 穀物は雲を望み、雲はその光(7)を撒布す。(12) 三 そは何處にても之を掌り給う者の御旨の導くままに巡り行き、全地の面にて之に命じ給う所を悉く果すなり。(13) 是は或は一族に、或はその地に、或は孰れにせよ、その御憐憫より之に命じて在らしめ給う處においてなり。(14) 三ヨブよ、之を聽け、起ちて天主の奇しき御業を思い廻らすべし。(15) 汝

語「全天」。―(4) 天主は暴風雨で御力の程を示し給うが、御自らは依然、見えず届かざる所にましますのである。―(5) 南國ゆえ。―(6) これらの現象は人を無力にする。雪や冬の雨は、農夫がいくら働きたいと思つても、それができないようにする。―(7) 降雨の前に閃く稲妻。

二四 義も偉大にして、言に盡し難し。二四されば人々は彼  
 二三 を十分に見極むる能わず、彼は御力も、審判も、正  
 二三 にして、天主を畏れ讃えんが爲なり。13) 二三我等は主  
 二三 ぎて之<sup>12)</sup>を吹き散らさん。二三金の出で来るは北より  
 二二 ど人々今光を見ず、忽ち大氣凝りて雲となり、風過  
 二二 や、人語りしのみにてても、滅ぼさるべし。11) 二三され  
 二〇 れたればなり。10) 二〇誰かわが云う所を彼に告げん  
 一九 彼に云うべき事を、我等に示せ、蓋は我等闇に包ま  
 一八 服は熱からずや。一八汝は大方彼と共に、青銅もて鑄  
 一七 き知識を有つや。一七南風地を吹き過ぐる時、汝の衣  
 一六 うかを知るや。一六汝、雲の大いなる通路を知り、全  
 天主がその雲の光<sup>8)</sup>を示さんとて、何時雨に命じ給

8)「雲の光」とは、雨があがつてまた  
 青空になることか、または稲妻をさす  
 のである(一節のように)。また  
 雲間のすばらしい光の現象たる虹を云  
 つているのかも知れない。一)昔の青  
 銅の鏡のように堅い。一0)皮肉。お前  
 はそれほど賢いのだが、我々に教え  
 てくれ。一1)かゝる者は天主の御稜威  
 に壓倒されてしまふだろう。一2)天主  
 が光を雲で暗くしたり、青空にしたり  
 なさるやうに、欲し給う時と方法とで、  
 御自分のことを教え給うた者だけが天  
 主を悟っている。一3)ヨブ自身がいみ  
 じくも云っているやうに、人間はいか  
 に隠れた所からでも金を發見するすべ  
 を知っているが、天主の御智慧には及  
 びもつかない。

を畏れ、己を賢しと思ふ者は、皆敢て彼を仰ぎ見ざるなり。」

### 第三十八章

天主御言を挟み給いて、その造り給いし物より、人には主の御力と御智慧とを悟る力なきことを示し給う。

七	六	五	四	三	二	一
る。その時には曉の星々齊しく我を讃め、天主の	上にか据えられたる、また誰かその隅石を下した	上に測量繩を張りたるは誰ぞや。六その基部は何の	とせば、その度量を定めたるは誰ぞや。またその	にありしぞ。汝悟る所あらば我に示せ。五汝もし知	や。男子の如く汝の腰に帶せよ。我汝に問わん、	一時に主旋風の中より、ヨブに應えて曰いけるは

**第三十八章** 1) 天主直接の御啓示がこれまで論争を落着させる。シナイ山その他における天主の御出現を思い合せよ。2) 天主がヨブの不幸を許容されつつ志し給う御計畫。3) 小アジアでは旅や激しい労働をする時には腰に帶を締める。4) 「基を据える」という云い方は、地が建物の如く丈夫な柱か土臺の上に載つていふ詩的想像による。5) どうして質量のある地球が空間に浮いているのか。



八 子等<sup>6)</sup> 皆歡喜の聲を擧げぬ。八海さながら胎内より出ざる如く、噴  
 出でし時、<sup>7)</sup> 戸もて之を閉じ込めしは誰ぞや、<sup>九</sup> その時我雲をその  
 衣服となし、襦袢に包むが如く霞に包み、<sup>一〇</sup> 之にわが境界を繞らし、  
 門と扉とを設け、<sup>一一</sup> 云いけるは、<sup>一二</sup> 汝、此處までは來るべし、  
 之より先には進むべからず。此處にて汝の打寄する浪を碎かしむべ  
 し。〃と。<sup>一三</sup> 汝生れしより以來、朝未明に命じ、曙にその處を示し  
 たることありや。<sup>一四</sup> また汝地の端<sup>8)</sup> を攔みて揺り、惡しき輩を之よ  
 り振り落したることありや。<sup>一五</sup> そは印したる粘土の如くに造り直さ  
 れ、<sup>9)</sup> 衣服の如くにあらん。<sup>一六</sup> 惡しき輩よりはその光明取去らるべ  
 く、擧げたる腕は折らるべし。<sup>一七</sup> 汝は海の深處に入りしことありや  
 淵の底を歩みしことありや。<sup>一八</sup> 死の門汝に開かれたりや、汝その暗  
 き入口を見しや。<sup>一九</sup> 汝地の廣さを見渡したることありや、汝もし知  
 らば、悉く我に示せ、<sup>二〇</sup> 光明はいずれの道に住むや、<sup>二一</sup> 暗黒はいずれ

6) 天使達。大きい建物の基礎据付は歡呼と歌唱裡に行われる  
 7) 天主の創造力によつて。<sup>1)</sup> 夜はいわば地の衣服で、その端を曙が攔んで脱がせる。地は光り輝く姿になり、日中には晴着を纏うに至る。  
 9) 夜の間地は姿が見えなくなり明るくなるとまた現れる。ちやうど粘土に判を捺すとその跡がついて見えるのと同様に。

二〇の處に在りや。三〇かく云うは、汝がその孰れもをそれぞれの境界  
 二二に導くを得ん爲、その棲家の徑を知らん爲なり。10) 三かの時に汝  
 己が生るべきことを知りおりしや、己が日の數を辨えおりしや。

三三汝雪の倉庫に入りしことありや、雹の倉庫を見しことありや。

三三我は之を敵の時の爲、戦と闘いとこの日の爲に備えたり。11) 二四何

二五れの道よりして、光は擴がり、熱は地上に分配たるるや。12) 二五誰

二六が烈しき豪雨に通路を與え、轟く雷に道を拓き、二六一人なき地や

二七誰も死すべき者の住まざる荒野にまで雨を降らし、二七荒れ果てて

二八寂しき處にも之を満して、青草を生え出でしめしや。二八雨の父13)

二九は誰ぞ、露の玉を生みしは誰ぞ。二九氷は誰の胎より出でしや、空

三〇の霜は誰が生みしや。三〇水石の如くに固まり、淵の表面凍る。

三三汝昴宿の輝く星々を結び合すことを得んや、14) 大角の運行を

三三止め得るや。三三汝曉の明星をその時に當りて引出すや、宵の明

10) 光と闇とがいわばそのすみかから交互に地を訪れてくるから。

11) 天主が暴風や荒天を以て來給うのは、いわば地と戦いを交え給うようなもの。12) 人間

はいろいろな自然法則を究めたが、之を制定したことはない。

13) 創造者。14) 群がり集まつている七星は、スバルと稱ばれているが、これは紐で結び合されたように一緒になつてゐる。

三三 星をして地上の子等の上に昇らしむるや。三三 汝天の秩序を知るや、  
 三四 その地に對する關係を定めしや。15) 汝雲の中にて聲をあぐるを得  
 三五 るや、16) 滝なす水汝を掩わんや。三五 汝電光を遣して行かしめ得るや  
 三六 そは歸り來りて、汝に「我ここに在り」と云わんや。三六 人の心に智  
 三七 慧を入れたるは誰ぞや、雄雞に了悟を與えしは誰ぞや。17) 誰か天  
 三九八 の秩序を説き明すを得んや、また誰か天の調和18)を眠らしむるを得  
 四〇 んや。三八 何時塵は地に注がれ、土塊は相合したりや。19) 汝牝獅子  
 四一 の爲に餌食を捉え、その仔の食慾を満たさんとするや、四〇 その穴に  
 臥し、洞に隠れ待てる時に然なし得るや。四一 子鴉食物なきに由りて  
 彷徨いつつ天主に呼わる時、誰が鴉に餌を與うるや。20)

### 第三十九章

多くの被造物に顯れたる天主の御力と御攝理の奇しさ。

「汝野山羊が岩の間にて仔を産む時を知るや、また牝鹿の産を見守りしことありや。」

15) 天の秩序が地球に及ぼす不思議な影響  
 16) 之に命ずるために  
 17) 動物にも天主は本能を與え給うた。  
 18) 諸天體の調和。ヘブレオ語本「誰かよく革袋を傾けんや」。  
 19) 水陸の分離は創一・九、一〇に述べてある。――20) 詩一四六・九。



二 汝是等が孕みてよりの月を數えしことありや、またその産む時を知るや。

三 是等は産むに當りて身を屈め、産み落す折に呻吟を發す。四 その仔は離れて

牧野に行き、出でては復その許に歸らず。五 野驢馬を放ちて自由にしたるは誰

ぞや、その絆を解きしは誰ぞや。六 我こそ之に荒野を家として、塩地<sup>1)</sup>を棲處

として、與えしなれ。七 之は市の雜踏を蔑み、馱者の叫聲を聽き容れず、八 山

々をその牧場と見なし、あらゆる綠きものを探す。九 犀、豈、汝に仕うるを欲

せんや、また豈汝の馬槽の許に留まらんや。一〇 汝、綱もて犀を繋ぎ耕作に用う

るを得んや、之にあに汝に従いて谷の土塊を碎かんや。二 汝その力の大なるを恃

みて、汝の労働を之に委ねんとするや。三 汝之に頼りて、汝の作物を取歸らし

め、且打禾場に集めしめんとするや。三 駝鳥の翼は鵠や鷹の翼に似たり。

一四 是がその卵を地に残す時、汝或は塵の中にて之を濫めんとするや。一五 是は

それが足に踏まるべきこと、もしくは野の獸に潰さるべきことを忘れ、一六 その

子に情なきこと恰も己が子に非ざる如く、勞して空しくとも、更に氣に掛くる

第三十

九章

1) 塩地

は不毛

の地。



一七 ことなし。一七蓋は天主之に智慧を賜わず、また之に理解力を授け給わざりしが故なり。一八是は時至らば翼を高くあげて、<sup>2)</sup> 馬とその騎手とを嘲笑う。  
 一九 汝馬に力を與え、その咽喉に嘶きを與うるや。三〇 汝之を蝗の如くに跳躍らしむるや。その鼻息の壯なるは、怖ろしきばかりなり。三一 是は蹄もて地を搔き、氣負い立ちて躍り上り、兵士等に馳せ向う。三二 恐るるを蔑み、劍に後を見せず、三三 その上には箠鳴り、槍と楯燦く。三四 泡を喰み、猛り狂いて、地を呑み、喇叭の音の響き渡るをさえ物ともせず。三五 喇叭を聞けば則ち、<sup>3)</sup> ヒヒンと云いて、遠方より戦闘や、諸將の激勵及び軍勢の喊聲を嗅ぎつく。  
 三六 鷹あに汝の智慧によりて羽毛を受け、<sup>3)</sup> 其の翼を展べて南に向かわんや。  
 三七 鷲あに汝の命ずるままに騰り行き、高き處にその巢を造らんや。三八 是は岩の上に住み、峙つ岩や、近寄り難き懸崖の上に居り、三九 其處より獲物を探すに、その眼遠方まで見ゆ。四〇 其の子等も血を吸う、しかして凡そ屍のある所には、是忽ち至る。<sup>4)</sup> 四一 主なおも語を繼ぎて、ヨブに曰わく、<sup>4)</sup> 四二 天主と論

2) 駝鳥は飛ばぬが迅速に羽ばたいて走る速力を増す助けとする  
 3) ヘブレオ語本の動詞は「飛びかける」という意味  
 4) ヨブの語り方に對する天主の御批判。



七	者を打散らし、傲る者を見れば悉く卑うせよ。凡て高ぶる者を見て之を辱しめ、悪しき者をばその場を去らせず打滅ほし、 <sup>八</sup> 之を悉く塵の中に隠し、その面を坑に突入れよ。 <sup>九</sup>
一〇九	さらば我、汝の右手の汝を救い得ることを認めん。一〇視よ、我の汝と共に造りたる河馬 <sup>七</sup> は、牛の如く草を食まん。二その強さは腰にあり、その力は腹の臍にあり。三はその尾を杉の如くに <sup>八</sup> 立つ、その鞏丸の筋は絡み合えり。四その骨は青銅の管の如く、その軟骨は鐵の板の如し。五是は天主の御業の第一にして、之を造り給いし者 <sup>九</sup> 劍を添え給う。六山々是が爲に草を生じ、野の諸々の獣 <sup>一〇</sup> 彼處に遊ぶ。七是は葦の隠處や、濕れる處にて物蔭に眠る。八影その影を覆い、川の柳之を圍む。九視よ、是は河を飲みほして驚かず、ヨルダン <sup>一〇</sup> もその口に流れ入るべし

光輝、あの曇りなき靈威の光を有し、且示すべきである。  
 6) これができない以上、汝には天主と論争する資格がない。  
 7) 非常に大きな四足獣。この語は多分水牛の意であるうが、こゝでは河馬をさすのに用いてある。――8) 杉の如くとは、極めて短かいその尾の長さをさすのではなく、その堅さと太さをいう。  
 9) 劍とは外に突き出ている牙。これで草を切ることもできる。  
 10) この巨大な動物は血を好むものではない。――11) こゝのヨルダンは一般の河川の代用。



一九 と信じて疑わず。一九その眼の前にて、人釣針に依るが如く  
 二〇 にして之を捕え、木釘もてその鼻孔を貫く。二〇汝釣針もて  
 鰐<sup>レウイアタン</sup> 12) を引出すを得んや。また繩もてその舌を結ぶを得  
 二一 んや。11) 三汝その鼻に環を通し、或はその顎に轡を嵌む  
 二二 るを得んや。三三是は争で頻に汝に願ひ、または汝に柔しき  
 二三 言をかけんや。14) 三三争で汝と契約を結ばんや。汝之を捕え  
 二四 て、いつまでも僕となすべけんや。二四汝鳥と遊ぶ如く是と  
 二五 遊び、また汝の婢等の爲に之を繋ぐを得んや。二五友人等是  
 二六 を切り刻むを得んや、商人等是を分つを得んや。二六汝網に  
 二七 その皮を、魚庫にその頭を、満たすを得んや。15) 二七是に汝  
 二八 の手を下せ。その戦鬪を心に留めよ、然らば累ねてまた云  
 うことあらざるべし。二八視よ、彼の希望は彼を裏切らん、  
 彼はみなに見る所にて、倒さるべし。16)」

12) この名詞は「うねうねしたも  
 の」という意味で、聖書中ここ  
 かしこに巨大な或爬虫類をさす  
 のに用いられている。ここでは  
 鰐を意味すること確實。11) 藺  
 草から造つた繩は、エジプトの  
 漁師が、捉えた大きい魚の顎に  
 通し、岸に繋いでまた水中に入  
 れ、賣るのに取つておくために  
 用いる。14) 馴らすことができ  
 ないので、賣物にはならない。  
 15) 鰐の甲羅には槍を投げて、パ  
 チンとはね返し、役に立たぬ。  
 16) それでも敢てこの巨鰐を捕え  
 ようとする者は、みなの前で  
 負けてしまふだらう。



# 第四十一章

更に鰐に就きて。

一 我は情なき者の如くに、是を激せしめじ、蓋し誰かわ  
 が面を冒し得る者あらんや。1) 誰か先に我に與えて、我  
 の之に報いざるべからざる如くする者あらんや。天が下  
 なる一切は、これわが有なり。3) その言強くとも、また  
 願に應わしくとも、我之を容赦せじ。2) 誰かかの者の  
 装の外被を剝ぐを得んや、3) また誰かその口の中に入  
 るを得んや。5) 誰かその顔の戸を開くを得んや、周圍に  
 あるその齒は恐ろし。6) その体は鑄造したる楯の如くに  
 して、鱗互に隙間もなく押列び、7) 一は一と相接して、  
 風もその間を通り得ず、8) 此は彼と相着きて互に繋がり、  
 決して離るることなし。9) その嘘は火の輝き、4) その目

## 第四十一章

1) 私は鰐を怒らすこ  
 とを誰にもすゝめない。だが私は  
 鰐以上に恐ろしい者である。

2) ヴルガタによれば、二、三兩節

は一節後半の敷衍。天主に敵對す  
 る者（一節）は、人間は傲慢や創

造主に對する威嚇によつても、ま  
 た手遅れの、もしくは偽善の願

によつても、永遠の主の正義の御  
 攝理を變えることができぬのを悟

るのである。——3) 四節は鰐の記述  
 の續き。装いとは鱗のこと。

4) 鰐は大口を開いて太陽の方に向  
 きたがるが、その刺戟でくさめを

一〇 は曙の眼瞼の如し。5) 一〇その口よりは、松に火を

二 點したる如き炬火出で、6) 二その鼻孔よりは、熱

三 して沸らしたる釜より立つ如き煙出ず。7) 三その

四 氣息は炭火を熾し、火焰その口より出づ。三その

五 頸には力宿り、その面の向かう所窮乏8) 生ず。

六 一四その肉の部分は相密着して、雷光を之に下すと

七 も、その中に徹らざるべし。一五その心臓は石の如

八 く堅く、鍛冶屋の鐵床の如く硬し。一六その身を起

九 すや、天使等9) も怖じ恐れて己が罪を潔めん。10)

一〇 一七劍も是に當りては一溜りもなく、槍も胸當も亦

一一 然り。一八實に是は鐵を藁の如く、青銅を朽木の如

一二 く思うなり。一九弓射る人も是を逃げ去らしむる能

一三 わず、投石器の石も是にとりては藁の如し。二〇是

二〇

する時、多量の水を吐き出すと、それが日光にキラキラ輝く。1) 鰐の浮きあがる時まず見える眼が曙に譬えてある。エジプトの象形文字では、鰐の眼が「曙」に用いられている。1) 日光に息の輝くのが燃える炬火に似ており、水滴が火花のように見える。1) 鰐の氣息が煮え立つている釜の湯氣に似ている。1) 8) ヘブレオ語本「恐怖」。1) 9) ヘブレオ語本「勇士さえもおののく」。ヴルガタの *angelis* という語が鰐に對して用いられているとすれば解し難い。それで聖グレゴリオはこの箇所をサタンに當てはめて、それが永劫に地獄に落された時天使達さえ戦いたと譯している。10) 鰐に對してなら、「救いを求める」意味。

二一 は鐵鎚をも藁と見做し、槍を揮う者を嘲り笑  
 う。11) 三日光その下にあり、是は泥の如くに黄  
 金を敷く。12) 三是は深き海を鼎の如く沸き立  
 せ、香油の煮え沸る時の如くならしむ。13)  
 三三 その行きし後には通りし徑光り、淵に白髪を  
 二四 生じたるかと怪しまる。14) 地上には是に匹敵  
 うべき力なし、是は何物をも恐れざるよう造ら  
 二五 れたり。是はあらゆる高きものを見る。是こ  
 そはすべて高ぶる子等の王たるなれ。15)

## 第四十二章

ヨブ服従して、天主之に恵を與えんと語り給う—ヨブその友等の爲に  
 犠牲を捧ぐ—彼富み且子等を恵まれ福なる死を遂ぐ。

一 ヨブ乃ち主に答えて申しけるは、三我は知る、汝は一切をなし得給り、また如何なる

11) 昔攻撃に用いた武器を、この前後に悉く  
 擧げ、すべて役に立たぬと云つてある。  
 12) 鰐は日光を有難がらない。黄金も是には  
 泥同然である。ヘブレオ語本では「その下  
 には瓦の碎片あり、泥の上に麥打車を引  
 く」。—13) 鰐が進む時の沸き返る水のすさま  
 じい泡の敘述。—14) 老人の白髪頭のように。  
 15) 鰐は體力ではあらゆる生物中強く大きい  
 すべてのもにまさる。神秘的にはすべて  
 の傲慢者の王たる悪魔と解することができ  
 る。

三 思念も汝には隠れなし。1) 三 浅慮にも聖慮のある所を蔽うこの者は誰ぞ  
 四 や。されば我は愚にも、わが知識の遠く及ばざる事を語り、  
 四 聽き給え、我語らん、また我汝に問い奉らん、汝我に答え給え。2) と。  
 五 汝のことは我耳に聞き傳えて聞きおりしが、今わが眼汝を見奉る。3)  
 七六 六 この故に我已を責め、塵と灰との中にて悔悛め奉る。』と。七 さて  
 主ヨブに是等の言を語り給いし後、テマン人エリファズに曰いけるは  
 「わが忿怒汝に對し、また汝の二人の友に對して、火と燃えたり、其  
 は汝等わが前にて、わが僕ヨブの如く、正しき事を語らざりければな  
 八 り。ハされば汝等、自ら牡牛七頭、4) 牡羊七頭を取りて、わが僕ヨブ  
 の許に行き、汝等の爲に燔祭を献げよ。わが僕ヨブもまた、汝等の爲  
 に祈るべし。5) 我その面を喜び迎えて、愚を汝等に歸せざらん、蓋は  
 九 汝等我に向かいて、わが僕ヨブの如く正しき事を語らざりければな  
 り。』と。九 是に於いてテマン人エリファズ、スヘ人バルダド、及びナ

第四十二章 1)ヨ

ブは自分が受けた  
 試練の裡に在つて  
 天主の無限の御叡  
 智と同時にその全  
 能をも認められた。  
 2)ヨブ自身の言葉  
 (本一三・二二參  
 照)。深くへりく  
 だる卒直な言葉。  
 3)天主の御出現に  
 接し、心を照らさ  
 れて。—4)七は當  
 時の完全数。  
 5)聖人代願の教理  
 を示す例となる箇  
 所。



一〇 主ヨブの面を喜び迎え給えり。一〇主またヨブのその友等の爲に祈りし時、その悔悛めを省み給い、かくて主ヨブの前に有ちたりしものを、悉く倍加して授け給えり。二是に於いて彼のすべての兄弟、すべての姉妹、及び舊彼を知れる人々皆彼の許に來り、彼と共にその家にてパンを食し、彼に向かいて頭を振り、<sup>6)</sup> 天主の彼に下し給いし諸々の災厄に就きて彼を慰め、且各々羊一頭<sup>7)</sup> と金の耳環一箇<sup>8)</sup> とを之に贈りぬ。二三主は始よりも終に、ヨブを祝し給いければ彼、羊一萬四千頭、駱駝六千頭、牛一千軛、及び牝驢馬一千頭を有てり。二三また男子七人、女子三人ありしが、一四彼一人を「晝」<sup>9)</sup> と名づけ、第二を「薰」<sup>10)</sup> と名づけ、第三を「白粉角」と名づけたり。一五ヨブの娘等ほど美しき婦

6) 遅まきの同情のしるし。  
 7) 羊一頭の像のついている銀貨一枚。—8) 昔の小アジア人の大好きな裝飾。—9) 晝のよう美しい。ヘブレオ語本ではイエミマー、「鳩」の義。—10) 月桂樹屬の芳香ある植物。

一六  
人は、全地を探ねても見當らざり  
き。その父彼等にも、その兄弟等  
と同じく遺産を與えたり。一六この  
後ヨブは百四十年生存え、その子  
等に孫等と四代までを見、年老い  
齡満ちて死せり。11)

11) 前に甚だ賤しめられたヨブが、今また高められて、キリス  
トの前表となる舊約の人物中に加えられる榮を得たのは  
キリスト教から見ても全く當を得たことである。ヨブとキリ  
ストの似た所はおもにサタンの誘惑に始まり御復活御昇天  
の光榮に終る主の御受難に現れている。「キリストは是等  
の苦しみを受けて然る後己が光榮に入るべき者ならざりし  
か」(路二四・二六)。

昭和30年12月10日印刷  
昭和30年12月15日發行

定價 革製 700圓  
上製 550圓

譯者兼發行者 札幌市北十一條東二丁目  
光 明 社

代表者 札幌市北十一條東二丁目  
武 宮 雷 吾

印刷者 札幌市北十二條東三丁目  
長 內 夕 力

印刷所 札幌市北十二條東三丁目  
天使院印刷製本部

---

發行所 札幌市北十一條東二丁目  
光 明 社

